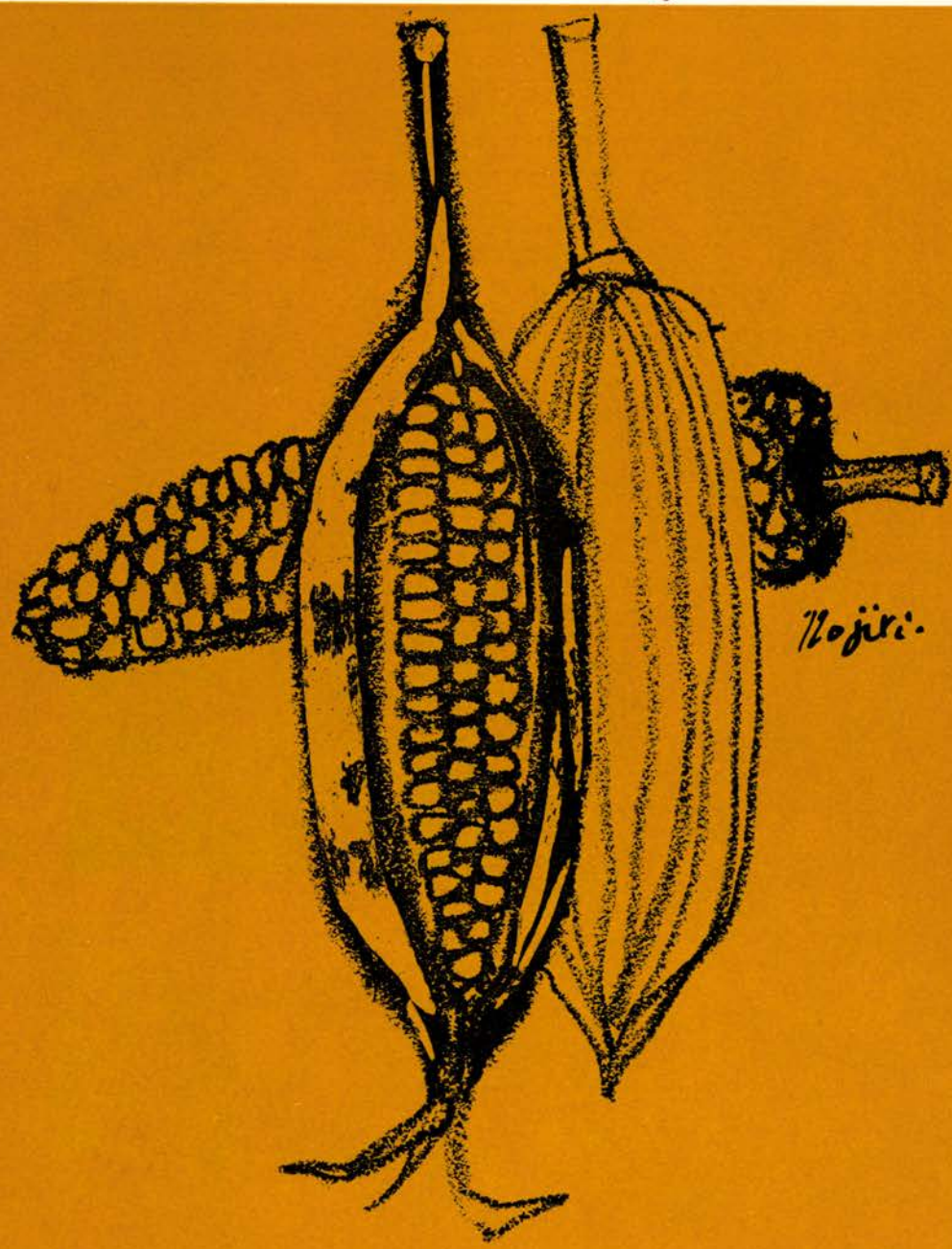


川柳の雑記



麻生路郎☆主宰

九月号

No. 436

Pensoj flugas trans la land - limon
THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

10月本社句会予告

兼題
毛筆
夕映え
巨木

本社川柳忌句会

初心者歓迎！

さあ、いらっしやい都心の川柳道場へ

日時 九月十日(火)午後六時
会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題「軸」(二句) 麻生路郎選

(路郎選に限り七時半〆切り)

「女世帯」(三句) 川村好郎選

「ゴム長」(三句) 吉田圭井堂選

「黒猫」(三句) 八木摩太郎選

席題三題(当日発表)

柳話 中島生々庵

呈賞 ☆各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞
会費 百円

幹事 紫香・いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・

与呂志・清人・水洞・すゝむ・薫風子・柳

宏子・舟遊

★投句だけの方は郵券三十円

同封(〆切九月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪(671)六〇八一

大阪市文化祭行事

秋にひらく

(第六回)

短詩文学作品展

会場 毎日ギャラリー(北区堂島毎日会館地階)
会期 9月30日(月)から10月5日(土)までの六日間
自午前十一時―至午後七時

作品 短歌・俳句・詩・川柳作家新揮毫作品
(半折・横物・色紙・短冊等)

出品其他のご用件は大阪市住吉区万代西五の二五
(電話大阪六七一局六〇八一) 麻生路郎へ問合わ
されたい。

主催 関西短詩文学連盟
後援 大阪市教育委員会

川柳雑誌社

お待ちせしました

あなたの句帖(第二版)が
出来ました

★路郎好みだけに、すばらしく気が
きいています。句会でお使いになる
なり、抜けた句の整理にお使いにな
れば、何冊かで、あなたの句集の礎
稿が出来ます。又柳友への贈答に、
句会の賞品にも最適です。ご利用下
さい。

一冊八〇円(送料別)

川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五丁目五番地
電話 大阪 六〇八一
郵傳口座 大阪 七五〇五〇番



不朽洞句帖

麻生路郎



老衰で死んだそうな
誰も何も云わない

毒素がどうあろうと

芸術の怒り

スピード化を軽蔑しながら
都心に生きる

水泳日本があやしくなった
魚という魚みな泳ぐ

白桃をめでてるうちに残暑が来

（第二回を節して）

稲の青が

帰途のわたしを淋みしうす

（ロン非名機遺愛）

泣け遺族 天候はいたずらものだった

川柳雑誌九月号目次

不朽洞句帖
川傍柳初篇研究（六）

題字：麻生路郎・表紙：野尻弘

丸十府・岡田甫
川端柳風・高須啞三味・前田喜代人
岡崎重義・清博・藤井和雄

川柳忌に思う
石曾根民郎氏に訊く
古きよき友の手紙から
諷刺の基盤（二）
寸感二三
北川春巢
橘高薫風子
東野大八
河野春三
吉田圭井堂

リレー句評
陽子・郎・圭
郎・水

名句と難句
打率 向 上
麻生路郎

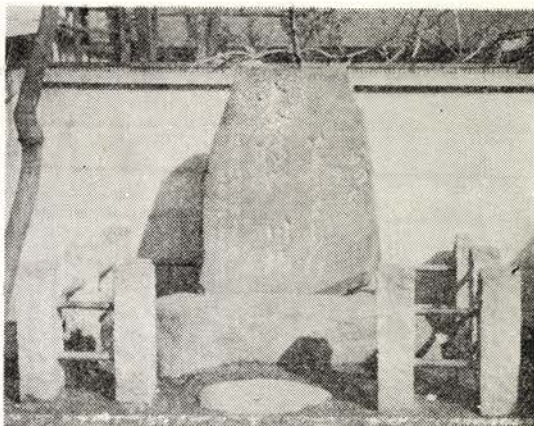
旅
水客・生々庵・薫風子・丁路
季賛・多久志・蘇堂
味平氏の巻

★現代柳人録
井財天
大万川柳「雀」発表
明治・大正柳誌順礼
富士野鞍馬
奥津啓一郎

川柳塔
同舟近詠
近作柳樽
金泥集
各地柳壇
麻生路郎
諸家
麻生路郎
北川春巢
麻生霞乃選

★柳界展望
入門講座
一路集「マイナス」
「根」
清水白柳
中島生々庵
野村味平選
直原七面山選

★柳樹室
（46）
（38）
（36）
（40）
（42）
（33）
（20）
（11）
（6）
（29）
（25）
（41）
（34）
（20）
（28）
（12）
（4）
（26）
（18）
（16）
（21）
（30）



初代川柳の「木枯や跡で芽をふけ川柳」の句碑・所在地 東京葛台東区浅草三筋町二の一〇
天台宗竜宝寺・昭和三十年九月二十三日全国川柳人
によつて再建（本田義花坊氏昭和三十四年に撮影）

川柳忌に思う

北川 春 巢

今年もまた川柳忌の月が来た。九月二十三日がわれわれ川柳をやる者の忘れてはならぬ初代川柳の没した日で、（ただしこれは旧暦であるが）没年は寛政二年（一七九〇）というから、今年の九月二十三日は一七三回目の祥月命日に当るわけである。

川柳をやる者が「川柳忌」を行なう。といえば、ちょっと変ったいい廻しのような気がするが、これは「川柳」という文芸の名称が、柄井（からい）川柳という人の雅号から出ているからである。柄井川柳はまた人呼んで「川柳の翁」とも称したので、川柳忌のことを「柳翁忌」とも呼んでいる。（狂句の方で「柳翁忌」といえば「鯛屋貞柳忌」のことなので「柳翁忌」は固有名詞とはいえない）

これは俳句の方で俳聖芭蕉の忌日（十月

十二日）を「芭蕉忌」といい、あるいは「翁忌（おきな忌）」と呼んでいる（「翁忌」は固有名詞になっている。）のと同じいい方なのだが、人の名前が文芸の名称になった所に、川柳の特色がある。われわれのやっている川柳を他の呼称に変えようという運動も一部には起こっているが、多くの川柳人達はこれには無関心のようにである。またこの川柳がいつころから川柳という名称で呼ばれるようになったのかも、多くの研究にもかかわらず、まだはっきりせぬらしい。はじめは「川柳点」、「川柳評」などと呼ばれていたことは確かである。「点」とか「評」とかは現在の「選」のことで、「点者」「評者」といえば「選者」のことである。

柄井川柳は本名を八右衛門といい、享保三年（一七一八）に浅草竜宝寺門前の名主の家に生まれ、宝暦五年（一七五二）名主

句には賞を出す、などということは現在の川柳界ではちょっと考えられぬことである。

入選句をまた刷り物にして発行したのが「万句合（まんくあわせ）」といわれるもので、半紙一枚位いの刷り物だったらしい。「川柳評万句合」というのが残っている。川柳が万句合の点者になった当時、江戸にはすでに多くの点者がいた。例えば雲鼓、苔翁、収月、露丸、等々二十人以上もあつたらしく、それぞれ「雲鼓評」「苔翁評」などの万句合が発行されていた。「川柳評」は後には江戸一番の人気を得たのだが、はじめての宝暦七年八月二十五日開キの際には僅かに「万句合惣高二百七員」と発表されており、集まった句は万にほど遠かった。川柳評の万句合はその後年末まで毎月五日、十五日、二十五日と五の日に発表されたが、翌年からは八月十五日から始まっている。その後十日毎の投句数は次第にふえて、六年目の宝暦十二年十月十五日開キの際には惣句高一万四九一員と万を突破するに至った。万を越したのがその年には三回もあり、名実共に「万句合」といえるようになった。明和になってからは川柳の評判益々よく、他の点者の万句合は川柳点とは全く比較にならぬ状態となった。川柳没年までの三十三年間、寛政元年まで選句を行なったが、現在判明しているだけで一万句を突破すること七十四回内二万を越すこと三回に及んだという。投句者の「川柳点、川柳点」という声はいよいよ高く、

また後には、前句なしで付句の十七字だけを一句立てとして詠むことが行なわれこの文芸を「川柳」と呼ぶようになったものと思われる。これにはまた、前にちょっと触れた「柳多留」の刊行が与って大いに力があったと思われる。「柳多留」初篇は、明和二年（一七六五）、呉陵軒可有（こりょうけん・かゆう）という人が、川柳の点した「川柳評万句合」の中から、前句がなくとも意味の解かる句を集め、出版したものである。前句なしで意味の解かる句の句集が出たということ、またこの句集に採録されたいという作者の願望が、川柳の所へ投句の集まる一大原因にもなったであろうし、また前句なしで意味の解かる句を作る、という糸口にもなったと思われる。

「柳多留」初篇は、宝暦七年から同十二年までの六年間に川柳が選をして万句合の刷り物に発表した入選句、約七、八千句の中から七百五十句を選んでいる。「柳多留初篇」が川柳のバイブルとして現代の川柳作家にも一読を奨めたいのは、その厳選の故に垢抜けした句やセンスのすぐれた句が多いからにはかならない。「柳多留初篇」の句は現在、中学校や高等学校の国語教科書にも多く採られている。「柳多留」の評判も誠によく、以下第二篇が明和三年に発刊され、その後もほぼ毎年一冊宛、「川柳評万句合」の中の句から採って出され、呉陵軒可有の没（一七八八、元明元年）後は編者

が替り、ついで川柳の没後は選者も替って後には年に三冊も四冊も刊行されて、第六十七篇（天保九年、一八三八）まで出ているのである。「柳多留」がいかに庶民に人気があったかがうかがえよう。

ところで前に述べた如く、川柳の選句ぶりは評判がよく、投句も多く集まりその原因はもちろんその選句眼がすぐれていたからであり、またその選句態度が公平、慎重であつたからといわれるが彼は死に至るまでの三十三年間、エネルギッシュに選に従事した。しかし川柳自身は作家としては余り活躍はしなかったといわれている。辞世の「木枯や跡で芽を吹け川柳」の句も、川柳というよりはむしろ俳句に近いように思われる。没後は竜宝寺に葬られ、その墓は昭和三年に史跡に指定された。句碑は辞世の句を刻んで元保十年（一八三九）九月二十三日、五十回忌法要が営まれた時に同時に建立されたが、大正十二年九月の関東大震災で破損した。昭和十一年九月、全国川柳家有志で同じ句の句碑が再建されたが、これも昭和二十年の戦災にあつて消滅した現存のものは、昭和三十年九月に建てられたものである。

さて前に述べた如く、「川柳評万句合」の発行は毎年年の前半は休みで、たいていは八月五日（はじめての年は八月二十五日）が初会で、十二月まで下半期に月三回宛行なわれた。万句合の投句者にとってはこの

前半の休み期間が退屈でたまらなかったであろう。その期間中には川柳を招いて句会を開き、選や指導をしてもらっている。それらの句会の句集が多くはないが出版されていて、現在「川柳選句集」として岩波文庫から活字になって出ている。それらは、一、「川柳評」（かわぞいやなぎ）五冊（この研究は目下「川柳雑誌」上に連載されている。二、「やない笛ばこ」四冊（第三篇は未発見）三、「藐姑柳」（はこやなぎ）一冊、四、「柳籠裏」（やなぎこり）三冊（初篇、二篇は未発見、第三篇のみ現存）五、「玉柳」一冊、である。その他の末番句を集めた「末摘花」も川柳の選になるものであるが、これは句の性質上岩波文庫には収められていない。「末摘花」以外、「柳多留」を含めていずれも「柳」に關係した書題がついているのは、選者の川柳に因んだものと思われて興味深い。

いずれにしても、当時江戸に二十名以上もいたであろう前句付の選者の中で、川柳は断然トップをリードし、その万句合の刷り物から「柳多留」が編纂せられ、これが庶民の好みに合ったため次第に六十七篇までも続き、それを見た明治の人人から「柳多留に返れ」の声を発せしめたのは、初代川柳の偉大さである。九月二十三日の「川柳忌」

に際して、この偉大なる川柳を偲び、われわれもわれわれの川柳をもう一度考えてみることは、意義のあることと思うのである。もちろん柳多留の時代とは時代も違ひ当時の風俗習慣も解らぬことが多く、また日常の会話語さえ當時とは違っている今日である。読んで意味の判然としない句も多い。「柳多留初篇」の研究は現在「川柳」の誌上に発表されつつある。ちょうど「川柳」の研究が「川柳雑誌」上に載っているように、しかし一句一句の解釈については研究者の間で議論百出、というような句もすくなくないことは、雑誌の上で見られる通りである。しかし「現代川柳」（新川柳）の「芽」がその中にあることは間違いない事実である。われわれはそれをこそ再発見しなければならないのである。それが、われわれが初代川柳を思い、「川柳忌」を修する本当の意義である。



結婚式場 長生殿

近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場 貸衣装も
豊富にそろえております ●6階



大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171

川柳塔

麻生路郎選

大阪市 中島生々庵

老いを知る日何か笑いをほしくなり

嘘もほんまもないこと見抜く税吏の目

倅せは腹這いで孫と語り合い

豊中市 若本多久志

内閣改造関心もない暑さ

葬式も月賦でいける世とはなり

孫の教訓き合う齢にふと寂し

大阪市 正本水客

雷鳴のなかで時計が鳴っている

めくら千人と自分に言いきかせ

物好きのまじる善意と知っている

見送りの演技背のびもして見せる

高槻市 丸尾潮花

目薬の瓶がころんで居る机

レコードに催促される帯をしめ

銀座の夜お師匠さんの浴衣帯

大阪市 北川春渠

冷蔵庫買うたに水作るだけ

子の試験暑いと云わぬことにする

錠剤の丸さ掌にかけを持つ

住宅公庫の石橋の叩きよう

ワイマル羽佐間柳葉

皮膚の色月給の高を区別する

堺市 吉田圭井堂

限界を説いて政治を見捨てさず

後添いを勧めて呉れぬもどかしさ

ライバルの店で専務になった部下

円満な家庭に見せるこの苦心

防府市 長野井蛙

毒舌をつんば枚敷に封じ込み

役得の酒が身の程忘れさせ

岡山県 直原七面山

恋愛至上妻子四人を振りすてて

子のような姦から不実をなじられて

子に百姓はさせぬ氣そつと田地売る

子の前で後妻が欲しいとも言えず

恋もなく出雲大社の砂利を踏む

補聴器の母と文楽観て帰り

鳥取市 河村日満

札幌の旅にて

札幌が近く家々異国めき

鹿児島にて

のしかかる近さにかすむ桜島

大阪市 牟田一哲

人づくり先ず池田さん襟ただせ

新郎へ新婦ささやき客がてれ

倉敷市 木村千客

老化防止を勧説して

にぎにぎをせよとくるみをもらいけり

ぬけぬけと結構後家も楽しいと

後家の庭テッセンが咲きバラが咲き

借金上手整理は人委せ

倉敷市 田垣方大

例えばの話で借金ことわられ

秋風に生活力がゆきぶられ



浜辺だけの恋とわかつた秋の風

加賀市 野村 味平

指輪など曲げておきなど宿酔の

砂利道へハイヒール家禽のよう歩き

悪名で鳴して寄進はズバ抜けて

大阪市 木村 水洞

子の械嫌とるほどまでは衰ろえず

傘さして砂丘に佇つもスケジュール

大阪市 後藤 梅志

檀那寺和尚に物価論をきき

酔うているのが解らない釜ヶ崎

米子市 小西 雄々

迷惑をかけ田満にスト妥結

隣室で反主流派は飲みなおし

大阪市 山川 阿茶

ドサ廻り顔塗りながら子守唄

若造り勝手な時は年になり

花鯉さえぬれりや風に飛ばず

加賀市 那谷 光郎

許されぬ恋は墓場も怖くなし

君の言うそれも一理と無視される

悪友が財布覗いていくら貸す

大阪市 中島 小石

女にもよき世となりぬビヤホール

この寝顔母になてつく子とみえず

気がようて寄附はいつでも右翼なり

大阪市 福井 野迷路

近日にめしをの不渡り頂戴す

ずけずけと大人のうそは許される

岡山市 浜田 久米雄

肩書があればどあつてよくも生き

退職をした人に目を反らされる

講習会眠たい人は寝せておき

出雲市 尼 緑之助

阿呆になる話暑さのこもる部屋

大阪市 水谷 竹荘

一心同体勝手な時に言う言葉

京都市 大鶴 喜由

急患の裾を合せる手が動き

相合傘肉がめり込む程に寄り

風車風を探して店を出し

飯の足しにもならない唄にかぶれ果て

奈良県 飯 降白香

枕辺へきた子の黒い爪をきり

ゆれのこるブランコへ赤い夕焼けが

呉市 林 野魅光

暖房の文字を残して店を閉じ

コスモスに隔離病舎は取り巻かれ

岡山市 服部 十九平

相談にきた娘がアカハタ置いて去に

来客に断りアイロン消しに立ち

お茶席にマンボズボンでかしこまり

恋を得てミシンの音もリズムカル

西宮市 若林 草右

一視同仁暴力も乗せ拘摸も乗せ

高槻市 山田 季賛

工事工事へ人づくり等言うとならず

岡山市 田村 藤波

私等が拾えば落穂絵にならず

健康な乞食に恵む惜しい金

奥さんは先生亭主の洗ぎもの

見島市 本田 恵二朗

ラブレター社の封筒でさりげなく

旅はよし仲居の方言あきず聞く

京都市 松川 杜的

夕立が上って子等と虹探す



アセチレンの香いが欲しい夜店の灯

毛馬の閨門にて

淀の水難史へ夕陽の唯赤く

鳥取市 森本法泉子

この席も市会議員がしゃべる役

堺市 高崎雄声

太ッちよが横に座って暑くるし

大掃除大きい家がいやになり

貧乏ゆすりして歯医者のを待ち

島根県 藤井明朗

嗟呼ぶ声が流行歌で戻り

法善寺横丁庶民の匂いがし

雑踏も一人歩きは気楽なり

岡山県 永松東岸

オリンピック目あてと豚を飼わせられ

うちの田も会社が買いに来んかいな

背のチャック何処のどなたがあけるやら

倉敷市 野田素身郎

先代の門札かけている養子

ナイトーが始まり家事を手伝わず

一等車室外美人乗つて来ず

妻退院三面鏡をまずのぞき

芦屋市 丸川初甫

七夕の笹の高さへ抱き上げる

岡山県 池田古心

医者だけが仕事するなと云うてくれ

小平市 石居高志

年令的限界平泳ぎにも息が切れ

君だけを頼つてゐるぜと言うた嘘

東京陸軍幼年学校同窓会

その昔竹刀を持った手の握手

大阪府 早川清生

誹謗して帰る在日留学生

女中の恋中之島へはまだ行かず

ハイクに来駅の裏道歯を磨く

捨てた子に詫びおり高利とつており

おじぎしておじぎして住みなれても他郷

岡山県 池上知恵美

百田亭主ザンコク物語り飲みながら

大阪市 橋高薫風子

ラーメンの胃の腑に思索なかるべし

驚の眼も駒鳥の瞳も鳥の目や

下関市 中村九呂平

どう替えて見ても八畳だけのもの

四十年のしこり女房と湯にひとり

停年退職女房が家族風呂に照れ

元職場からの便りに眼がうるむ

奈良市 宮口笛生

湯原温泉にて

野天風呂の人魚に写る月明り

大阪市 西川晃

考へぬ輩になつてゐる炎天下

強引に寄附させといて感謝状

嘘をつくの文獻を引用し

かかる世にばくちで食つてゐる誇り

神戸市 仲どんたく

夏の夜を何でも云える人と居て

ホステスふと自分が可哀いそうになり

平田市 久家代仕男

質屋とも馴染 ひ弱な子を育て

一品で飲む常連は裏から来

大阪市 本多柳志

寛寿郎に似た天皇で親しまれ

道楽者と云われて河豚を断れず

京都まで舌を覗にゆくベレー帽

牛歩戦術丁度時間となりました



出雲市 原 独 仙

横太りあゝ老妻は河豚に似る

免許証受けたが自家用いつのこと

西宮市 野 呂 鷗 汀

待つ身にも待たれる身にもしみる雨

念願の車を買って事故に会い

新潟県 高野 むじな

歌二ツ唄うて月給程貰い

女の尻押せる押し屋が羨まれ

大阪市 石 倉 旅 風

クーラーが落着きの無い部屋にして

谿の水音もいっしよに掬い上げ

夏の宵軒をかいて羨やまれ

大阪市 魚 住 満 潮

続西成界わい

共産党好きと嫌いが酔いつぶれ

ベテン師が蝶ネクタイでやって来る

大詰はお臍を露出して皆踊り

正業についていますとテキ屋なり

愛媛県 村 上 旭 童

つぶされる鶏ずらり雨にぬれ

いささかの流行麦藁帽にさえ

神戸市 傍 島 静 馬

敷かれてるふりして女房使うてる

事業慾安眠出来ぬほど拡ろげ

途中からテキスト頼るバスガール

大阪府 平 沢 保 美

信念の独走社運傾けり

倒産の社長議会へ行ってます

大阪府 河 井 庸 佑

言いたい事言うて来賓さつとひく

転職もようせず定年来てしまひ

大阪府 谷 沢 好 祐

お向いの青空車庫へないひがみ

五輪へ五輪へ草も木も靡く

堺市 高 津 徹 也

びわ湖にて

夕映えが無地のゆかたの背を染める

愛媛県 榎 紫 光

電化完了妻によりめく閑が出来

質流れ買えばポケットに飲んだつけ

ジャン友が去ねばチュー友やってくる

青森市 工 藤 甲 吉

年下とくらして先夫など忘れ

確実に欠かさずに来る請求書

土曜日の役人今来てすぐ帰る

松江市 小林 孤 呂 二

流れ星組閣本部の灯が消えず

休火山に似たり右翼が動き出し

チッポケな派閥市議会夜に入り

豊中市 林 夢 虹

日々新たな料理の下手な妻だけど

新妻の髪一本のピンもなし

大阪市 今 西 生 薔

老らくのデートお大師まいり抜け

羽田から都心へ車の遅いこと

京都市 室 井 八 九 寸

お布施出るまで坊や褒めまして

毛筆にすれば候のクセが出る

鞍馬寺奇祭

蛇退治竹の青伐る五条袈裟

岡山県 横 山 一 声

嫁がせた後は月賦だけ残こり

洗濯は私にさしてと恋すすみ

嫁いで十年江戸ッ子弁をまだ捨てず

町議さえ我が田へ水を引かんとし



愛情がないのに体だけゆるし

小松市 関戸宗太郎

弁護士に嘘つく事も教えられ

ステテコのまゝ野次馬となりけり

貧村と折紙がつきロケ来る

サンゲラス案山子もかけてみたかろう

石川県 高山涼髪

野の風に作家のネクタイひるがえり

こと金のことはこまかい眼鏡かけ

美祿市 安平次弘道

子のために残した金へも税をとり

道徳をなげけどゴミ箱は置かず

観光地雨にも負けぬ客もあり

凶作の視察も酒宴待つており

宇部市 平田実男

唇が触れて理性の弱さ知る

また過去に触れる旧家の灯が暗い

十代の夢は模造品で足り

その人の反面宝鑑^{くじ}買うところを見た

諫早市 川岡靈眼子

元賀陽宮恒憲王殿下と逢つて

美術屋の古手に似たる宮殿下

ふところが温るんで人にもう笑まず

銀婚も近く粗末にされている

醜いが味の上手なお手伝い

壊れ行く誇と知らず積重ね

ラジオ料理失敗も講義の中に入れ

河野建設大臣

何のその家焼かれても椅子残り

貝塚市 杉本一鶴

絶安へ小さな親切身にしみて

計算してたら青汁も飲めず

やせた手を君にあずける目のやり場

市電にて

ラッシュアワー紅一点の鼻に汗

タコ焼の味がええしにわかるまい

折詰が出るのでこのこつて行き

富田林市 浅川八郎

初子誕生数かれる第一歩と識らず

孫への賜物に統一制なく

根気ないのをスランプだとはおかし

岸和田市内 藤きさ子

風鈴もたまにはうるさいものうち

田植服着てもみめよい生れつき

つゆ草のむらさき朝の人通り

たなばたに逢わねばならぬ人も無し

青森県 木村涼人

ファイト／＼ゴム長にはげまされ

人不足バカンス族の知らぬこと

山寺にて

白い歯は見せじ修業の瞳はすわり

山寺に心して吐け排気ガス

大阪市 唐崎専^{しん}翁

宇宙ごっこで殺生やめてくれりやよい

同じこと繰返す日の速いこと

月世界よりも大事な延寿策

倉吉市 奥谷弘朗

近代化ここの木挽の音にまで

趣味だけですまぬ夫を不安がり

ジュースよりビールにかえた婦人席

兵庫県 遠山可住

一旗の意気ふるさとの義理を捨て

知事のような気分で代読やおら立ち

凶作の夏

兵庫県 河原みのる

コレ禍のバナナの如く麦を焼く

職人の嘘も年期を入れて吐き

小金もてば銀行が倒けへんかこけへんか

蛇の這う音してずるり帯は落ち

姫路市 隠岐 不酔

叩こうと思たら蠅の押んでた

円満に解決したと又一杯

耳元でキツトですヨと一寸つねり

鳥取県 清水 一保

社会学の方は先生よりすぐれ

京都市 都倉 求女

川幅の広さへ口も軽うなり

だれ切った音で市電は夏の午後

宵山の嘶子へすだれ巻きあげる

まんまるい夕月汗がみな引いた

出雲市 中川 晃男

転勤の訛々を子が消化

敗戦回顧

敗戦に生れ非行の子に育ち

詠 近 舟 同



大阪市 麻生 葭乃

打水にふるえる萩のそばで飲み

大阪市 橋本 緑雨

無口でも仕事をさせば役に立ち

海草を一つ置いて波は消え

須坂市 高峰 柳児

眼鏡かけかえて頑固になる構え

すぐ金に触れて年増の頼りなし

和歌山市 秋月 宏方

男対男の部屋の続く寮

赤電話うそをかけるなども云えず

風に添うて雲純情な生れつき

社長ある日子守した頃思い出し

大洲市 米沢 曉明

品切れへ拍子の抜けた市場籠

スイッチでどの提灯も灯がとまり

親しさはいきなり肌を脱いでよし

バカンスで会うた相手も連れており

今治市 長野 文庫

伸びきった木の葉で山に肉がつき

夏の色見たくないのかサングラス

根のことは考へないでポプラ伸び

当分は誤魔化しがきく根無し松

巖頭の松は至って頑固者

直線に棕櫚脇目もふらず伸び

大工さん非情な気持で見る巨木

今治市 月原 宵明

背に団扇さした同志の許婚

神官の家に生れて赤に染み

反抗の黙否はガムを噛むばかり

ハンドバックピースも出れば珠数も出る

名古屋市長谷川 鮮山

執拗に箸を離れぬ蓮の糸

本山のここだけでいい母の旅

会議とは名のみ膳立て出来た部屋

川傍柳初篇研究 (六)



氏代人舊田前

丸十府高須啞三味
岡田甫前田喜代人
川端柳風藤井和雄
清崎重義
岡崎重義
藤井和雄

40 開れへこも僧上る大さわざ

青峨

清「開れ」は、どら坊主が開って置く外妾。さてそのお妾さんの所へ、いつものどら坊主ではなく、こも僧が入っていった。さて、これはおかしい、ことによると、近所の連中がうわさ話に花を咲かす。

藤井「開れ」は、川柳ではどら坊主の妾としているが「こも僧」となると、何か法衣の下に世をしのぶ不穏なものを想像する。然も笠をとれば、苦みばしい男、これじゃ大さわざがおこるのも無理はない。

川端「こも僧」は虚無僧。ここでは、親兄弟の仇討のため虚無僧に変装した武士とみたい、そこで、開れ者の所へ虚無僧に変装した侍が「仇の片割れ覚悟」と踏み込んで大騒ぎになったのであろう。

高須「表面だけで、裏面のない句ではな

いか。あまり物々しく考える必要はないと思うが。

前田「開れ」「こも僧」それぞれの解釈通りであるが、この二者の関連がつかめぬのは残念。

柘植「虚無僧は、天下浪人のかくれ家といわれる程で、武士でなければ入門出来なかった。しまいには食いつめ者等がうまく入り込み、町人等を苦しめたいらしい。尺八を吹いて、物貰いをするわけだが、この尺八を吹く事は虚無僧に限り、他の人が吹くには許可が要った。それで、坊主が開れの家で尺八を鳴らしたところ、都合悪く表に虚無僧がいたため、上り込んで、イチヤモン付けたのと違うか？」

丸「虚無僧は、親兄弟の仇討のための変装もあったが、川柳では又女敵討、即ち情夫と失奔した姦夫姦婦を討つための変装も多い。傍一にも「ほろを見て女房ぞっとするとい、」(22オ)「こも僧に出ぬ日ハ乳

をもらふ也」(12オ)などが見える。姦夫と出奔して、その後開れとなっているのへ、元の夫が虚無僧姿でのりこんだのだから、これは大騒ぎとなる筈。

岡田「丸説通り。おそらく姦通でもして墮落した女を見つけたのである。

41 父ハ柳母ハさくらだとおもひ

三朝

清「素性法師の歌に「見渡せば柳桜をこきまぜて、都ぞ春の錦なりける」というのがあるが、この歌の文句取りの句ではなからうか。但し、句意が全然つかめない。

藤井「柳は柳橋、桜は夜桜で吉原、どら息子の行く先は、はたして父の言是なるか、母の言否なるか、と言った所ではないか。

川端「柳」は吉原の見返りの柳の略称。「さくら」は上野の桜。「母親はもったいないがだましよい」で、息子の行先について、母親は素直に信じ、父親は若い頃

身に覚えがあるので……。年頃の息子を持った両親の立場である。

高須「息子の行き先についての、父母の見解の相違の句には違いないが、「柳」と「桜」の解で、輪講者の間に意見が分かれた。さアどちらであらうか。

前田「柳」は吉原の見返り柳と柳橋の二説。「桜」は上野の桜、吉原の夜桜、それに御殿山の桜と三つある。「柳桜をこきまぜて母叱かり」の句、その他、柳橋、吉原の夜桜をよんだ遊興のものが見られるところからして、藤井氏の説をとりた。柳と桜を出したのは、勿論「見渡せば云云」の文句取りから来ているのであるが、「だとおもひ」はうまい使いようである。

柘植「父は柳のように腰が低くあたりが柔く、母は桜のように美しい。美人を女房に持った亭主、或いは商家の事だと思っていた。子供の眼を通して見た両親と違うか？」

丸「明解ではないが、わが娘の成長した美しい姿を、父は柳のようにしなやかだと思ひ、母はその容色桜のようだと思う……といった句か。(拾遺に「御つばねは柳さくらをこきつかひ」とある。それからヒントを得たものである)

岡田「小生は「柳」を、「柳橋とらやたいこを積んで出し」(タル二二)「柳から乗るとはどうか靡くやう」(タル一〇)の柳橋と解していた。息子の帰りがおそいが、母は花見と思ってるのに、親父の方は眼が黒い、吉原へ行きがったと、胸中にかんぐっている……と思っているが。

川端「だんだん解らなくなってきたが、

岡田先生の説が無難のようだ。

高須 作者の現在する現代句にさえ、解釈が幾通りも出来る句があるのだから、古句にそれがあつたのは、当然である。こういう平易に詠まれた句は、各人各説でさしつかえないのではない。鑑賞者がそう思つて、感心していれば、それでよいと思うが。

42 どの道に帰る思案の橋でなし

一甫

清 小綱町二丁目と二丁目の間に「思案橋」という橋が架けられてあつた。元吉原がこの辺にあつたわけだから、人々は吉原へ行こうか、芝居町へ行こうかと、この橋の上で思案したわけである。どっちみち、遊びに来たのだから、吉原へ行こうか、芝居に行こうか、とにかく家に帰るつもりはない。

藤井 投身防止の「一寸待て」札の効用と比較して如何？ ここが例の思案橋さと、行き過ぎる人の口に乗るだけのこと。

川端 思案橋に賛。吉原に行こうと、芝居町に行こうと、いずれにしても家に帰ることは考えていない。

高須 ずいぶんむずかしい表現だが、礎解および川端説に賛。「どの道に行くとしても、帰るつもりはない思案橋」という表現で、現在の前衛川柳を見るようで面白い。

前田 礎解に賛成。句としては、「どの道に」の「に」がよくきいていて、説明的なものを救っている。

柘植 何かの文句取りではないか。

丸 礎稿賛。「どの道」はどっちみち、

どちらにしても。別に文句取りではない。

岡田 諸説に尽きる。

43 百三十里も花嫁八行おもひ

五連

清 「百三十里」は、江戸から京都までの距離、但し、この句では、江戸から京都までではなく、ずっと遠くへ行くような気持。とすれば、嫁として他の家に嫁ぐ日の、女の心情を読んだものか。或いは、松ヶ岡へでも飛び出す気になっている嫁の心情を読んだものか。

藤井 やはり前説の「嫁ぐ日の心情」ではないであらうか。

川端 いいや、私は松ヶ岡と思う。追手を避けて逃げる十三里が、十倍にも遠く思われたことであらう。好きな男がありながら、親の決めたムコ殿をはっきり断わりも出来ず「晝置の一事南無三十三里」となつたものと思う。すなわち「百三十里」は道程でなく、嫁の気持を表現したものと思う。

高須 「花嫁は行く思い」は、必ずしも一人旅の気持とは限らないから、松ヶ岡行きとも断定できぬ。特に「花嫁」と言つたところが疑問。真解はどうか？

前田 川端説に賛成。「百三十里」で、いらいらした気分が出ている。「花嫁」は深く考える必要はないと思う。

柘植 結婚後日も浅いうちに飛び出したので、「花嫁」なのだろうか。「嫁」と「嫁」とによって意味が違ふ事が判別出来れば、良いのだが。

丸 松ヶ岡説賛。「花嫁」については柘植説に賛。「嫁」は「とつぐ」意。「嫁」

はよめ。「川傍」ではすべて「嫁」の字を用いているようだ。

岡田 鎌倉の松ヶ岡まで十三里。それを百三十里の家で暗示した句作だが、結婚当初の花嫁が縁切寺へ駆け込むとは、当人の意志を無視した政略結婚などの多かつた当時だからの句でもある。もしかすると好きな男がいたのかも知れない。また当時の婦女子は、常時あまり外出しないから、追手を気づかつての急ぐ気持ばかりでなく、旅なれない事も考慮に入れて解すべきである。

(三ウ)

44 子をかりて笑ふ時分に浅黄来る

(五鳥)

藤井 「浅黄」は①浅黄裏②村男だが、この場合は「あかねと浅黄まくり合ひ」の②と解したい。さて、その次が少々無理に解して、娘心で好いた男に気安く声もかけられないので、その手段として、借りてきた子供を抱いて、漸く子供もなれて笑い出した時分になって、男がやってきた。真に絶好のチャンス到来という所ではないだろうか。

川端 「浅黄」は浅黄裏の略で、江戸動番に出て来た田舎持のこと。一緒に出かける約束で、さそいに寄つてみたら、まだ出かける準備もしていないので、子を借りて漸く子供がなつて笑顔を見せる頃出て来た。田舎者は時間の觀念がなく、呑気だとの意に解したい。

高須 両説とも少し不安な気がする。確説が他にありそう。

前田 「子をかりて笑ふ」の飛躍的な根

拠がわからない。子が笑うのか、句の主人公が笑うのか、わからないし、浅黄裏との関係も解し得ない。主人公を私は遊女の意にとりたい。強いて解すると、子供をかりてあやしたりして愉快になり、遊女が笑っている時分、いやなやばな浅黄裏が来たぐらゐのところでは――。

岡崎 川端説に賛。礎稿の村男では、情事には邪魔者であるはずの「子」をわざわざ借りて来るのがうなずけない。

清 前田説をとる。遊女が子供を借りてあやし、ようやく子供がなつて興がのつてきた所へ、ヤボな浅黄がやって来た。遊女はがっかり。

丸 前田・清両説の通り「吉原昼見世」の情景である。昼過ぎから夕方近くまで見世を張っているが、さすがに昼の遊客は少なく、遊女はひまにまかせて手紙を書いたり、内所や近所の子をかりてきてふざけたりしている。「ひる見世はよく笑う子ばかりにやり」(タル三三オ)「昼見世へ遣り手の孫をおっぱなし」(タル四一九オ)浅黄裏は勤めの関係から、昼見世に遊ぶものが多かった。本句のある所以。

岡田 前説に尽きる。昼見世は閑散、店者とか、武士とか、時間や門限のある客が主で、素見物も少ない。「真つ昼間入る素見は田舎者」(玉柳八)で、江戸見物の田舎者ぐらゐ。

「昼遊びお客の方も勤めの身」

(タル一〇九三六)

「昼買ひに行かまいかと浅黄同士」

(タル二〇一九)

「白昼の四手こじりを二本出し」

「侍は坐るとすぐに時を声き」
(タル一三三六)

「早く来て夜のうち帰る浅黄裏」
(拾六八)

「もちろん夜遊びで泊まる浅黄裏もあるが、
昼遊びも多かったのである。」
(タル一三五五)

藤井「吉原の昼見世風景と判って、成程
と感心。遊女として女性、ひまな時は子供と
遊びたいであろう。参考句沢山、両先生に
感謝。」

高須「そうであろう。やはりビタリとせ
ぬ解には、何か落ちつきがない。「昼見
世」で動かない。両先生に脱帽。」
45 廿四五姿にくまれ盛り也

(葉十)
藤井「これは説明もいらないと思う。色
気たっぷり、欲気十分、にくまれ盛りもこ
もつとも。にくまれ盛りも人生の華ならば
こそである。」

川端「年令・容量共に落ち目の本妻と、
若く美しくして脂ののりきった妾との関係。
夫婦仲の危機を詠んだ句。」

高須「児童の憎まれ盛りは七才八才だ
が、お婆さんの憎まれ盛りは二十四、五才
だという句で、確解でよしと思う。」

前田「礎楓に賛成。」

岡崎「妾の女盛り。それを言っただけ。」

清「諸説に賛。」

丸「高須説に賛。」

岡田「他に解しようのない句。諸説に尽
きる。」

46 餅花を下戸取あつめ持って来る

(八中)
藤井「餅花「川柳辞典」によると、目黒
不動の名物、赤・白・黄に彩られた餅のこ
と廿八日が不動様の縁日。悪友たち皆で不
動様へ参拝すませて、お目あては品川へ。
上戸連中が出かけたあと、下戸一人が皆に
たのまれて皆の餅花とりあつめて一路帰宅
の句と思う。「しわん坊連れの餅花こと
づがり」よりはオヒトヨシな下戸に見え
る。」

川端「餅花は、見た目が綺麗なので、土
産としてよく売れたらしいので、酒宴が終
って酔人達が遊びに出た後の食べ残された
餅花を、下戸が集めて、土産に持って帰っ
たのだと思う。」

高須「目黒不動参詣の帰途、町内の下戸
が、皆の餅花を預かって帰った―それだけ
でよい句だと思う。」

前田「賛成。」

岡崎・清「川端説に賛。」

丸「餅花といえは、川柳では目黒不動の
餅花をいうのが定石。したがって礎楓並び
に高須説の如く解すべきである。類句は
「川柳吉原志」の四宿の部参照。」

岡田「「餅花」について一言。これに似
たものに藪玉というのが現代でもある。こ
れを見なれている頭で、餅花も相当大き
い、帰りに肩へかついて来るぐらいのもの
のかと思っていた。ところが最近、春信画
の「絵本江戸土産」を入手して、目黒不動
のところを見ると、餅花らしいものを売っ
てる店が至って小さいので意外だった。ど
うも一尺ぐらいの大きさらしい。もちろん

時代によって違うであろうが、安永八年版
だから、ちょうど「川柳柳」あたりの図。
(因みに、この本は川柳関係の絵が非常に
多いので、この本の企図を入れた「川柳江
戸土産」を今秋出す予定。出たら見て頂き
たい。)

47 わざとぶたれに羽子のこの邪覽をする

(一甫)

藤井「正月街上の好風景。段々こんな風
景が少なくなったのもさびしい事だ。娘も
ドライになったもの。「まあ見さんたら、
しんどいわ」という娘の色っぽい顔が見え
るような句。」

川端「若い男女の正月風景。「羽子のこ
をかさぬ子を嫁た、くまね」(既出)「歌
かるた女の中へまけに出る」(タル一九
11)

高須「羽子板をふりまわす娘子軍のなか
へ、無理に入る若い男のいやがらせ(ヨロ
ヨロと入るなま酔いなど特に面白い)それ
だけでよいのではないか？」

前田「諸説に賛成。但し、なま酔でなく
ても結構。」

岡崎「いやがらせでなく、媚態だろう。」

清「正月、若い連中の描写と解するだけ
でいいのではないか。」

丸「諸説につく。私はこの人物を、春機
発動期の御用ききの小僧と見ている。「邪
覽しちやいや」などと、綺麗に着飾った娘
などにぶたれて悦に入っているニキビ顔が
眼前に見える気がする。」

岡田「異議なし。」

48 寄らは切らんず勢で薬うり

品質優良

先カペン

TACHIKAWA PEN

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

立川ペン先株式会社

大阪府東区常盤町一丁目十一番地

(五東)

藤井「「あいやお立合い、こことも取り
出しましたるわ」と御存じガマの油売り
の、大刀振りかざしその薬売りの態、正に
寄らは切らんずの勢である。」

川端「賛成。大道での薬売り、客寄せの
場面。」

高須「賛。「寄らは切らんず」と、ずば
りと本格的に言ったところよし。」

前田・岡崎・清「諸説に賛。」

丸「居合ぬきの歯磨売りの情景。歯磨の
ほか歯痛止めの薬も売った。最も有名な
が浅草御蔵前の長井兵助、また三田松本町
有馬邸前にも某があったという。「絵本風
俗往來」その他に詳記してある。「寄らは
切らんず」などは、講釈師などから声きき
なれたことばであつたろう。「よらばきら
んず勢に下戸こまり」(16ウ)という句も
見える。」

岡田「歯磨売りの大刀の居合抜きは、画にもあって有名だが、その他にやはり傷薬を売るのが大刀の居合抜きがあったと思う。「アイサ佐様と小僧は切れ」というような句があるのを記憶しているが、この句の出典、いま太忙ですぐ調べられぬ。いずれ……」

前田「私のメモ帳に、次の句が見つかった。「太刀を極めて鼻糞売りつける」「膏藥屋目を明にくらませる」「葉売日がな一日血判し」これは、傷薬膏藥類のものであろうが、出典が書いてないのがミ

ス。

49 驚のくそで小ざむの錢もふけ (三朝)

藤井「驚の糞は、女……特に花柳界で洗顏に用いた。「小ざむ」が何やらわからない。御教示を待つ。驚の糞をこつこつためて錢もうけでもする気なのであろうか。錢もうけのせち辛さを笑った句か。

川端「驚」は金持の異称だが「大辞典」の例句解は化粧料に売れるのである。「驚のくそ」で化粧料になるのであろう。

「小ざむ」は小侍のこと。すなわち小侍の内職・「錢もうけ」が利いてくる。

高須「驚の糞」は、そのものが婦人の洗顏料。小侍が主人の飼っている驚の糞を、頼まれて御近所の婦女子に売ることであらう。

前田「川端氏の解でよい。「主人の飼っている」はうがすぎであらう。

岡崎・清「川端説をとる。

丸「驚の糞は、高級洗顏料として、ぬか

袋に混入したもの。「小ざむ」は小ざむらいの略、元服前の侍。「小ざむ」の用例は少なく、未だ他に見付からぬ。句意は、川端説の「小侍の内職」及高須解の如く、大家の雑用などしている小侍が、主人の飼っている驚の世話をしなから、その糞を丹念にためておいて、美顏料として売っては、小錢をもうけていると、見たい。

岡田「諸説に尽く。なるほど小侍を「小ザム」とした句は他にないようだが、小侍の句は相当たくさんあり、その一部分は「木槨花評釈」に引いてある。

50 一生の片目お金にきん句也 (龜遊)

藤井「お金キンは持參金の醜婦、しかも片目の娘さん。お仲人、結納金持って「さてさて本日はお日柄もよく、一生の堅めとして……」と言いだして、あわてて口を圧えてアツワ……ではないだろうか。きん句は禁句。

川端「賛成。堅めでなく、夫が生涯の禁句が「片目」だと思ふ。「おキン」と「キン句」の掛言葉。

高須「確解賛。但し、仲人だけではなく、周囲の者みなに禁句。

前田・清「賛。

岡崎「「一生の堅め」を「一生の片目」ともじったもの。

丸「岡崎・高須説の如くで、周囲の人すべてに禁句なのである。

岡田「目が悪いが、片目で五十兩というところだが、百兩持参……というから貰う事にしたら、完全な盲人。びっくりして仲

人に談ずると、だから片目で五十兩といった。……こんな江戸小説があった筈。

51 もち喰のむさと八名月をしよわす 泉河

藤井「しよわす」が何やらわからぬ。無理に解してみると、月見の席で、餅も結構、なお酒もいくらでも呑むぞとは、明月の席にふさわしくない奴だ、との意であらうか。「もち喰、呑むさ」と切ってみたが、自信はない。「しよわす」は「背負わず」身につかぬ、びったりしない、ふさわしくない、と解してみたが、しよせんしよわすで「不解。

川端「不明。「名月」は八月十五夜の月で、吉原紋日の月は八月十五夜と十三夜、吉原の句のように思うだけで、不解。

高須「正月の紋日に、八月の紋日の約束はしない……というだけで、よくはないか? 「むさとハ」は「むざとハ」で「無造作にハ」「不注意にハ」でよく、「しよわす」は「背負わず」で「背負いこまぬ」とであらう。

前田「むさ」はむしや、武者のこと。餅喰の武者とは名月にはびたりしない、矢張り酒の方でないと、ぐらいではないか。

岡崎「不詳。諸説おもしろいが――。

清「名月に、餅を喰ったり、酒を飲むようでは、この御人、風流を解さぬ。名月はもっと風流なもの、といいたいのではないか。

丸「「もち喰」は「餅食い」で「下戸」のこと。名月は十五、十三夜の名月、吉原

の紋日、「むさとハ」「しよわす」は高須説でよい。上戸なら酔った勢でということもあるが、いつも冷静な下戸ゆえ、金のかかる紋日の約束などを背負いこむことなどはないのである。

岡田「賛。呑んべえは酔った拍子に、大きな気になって、とかく失敗多し。呑まざる人は幸いなり矣。

藤井「「もち喰」「飲むさ」と、分けて読んでいたので、てんで意味がつかめず、まして吉原の紋日とまでは気づかず、確解めちゃめちゃで汗顔の至り。丸先生に感謝。高須「「もち喰い」を正月と考えたのは、言葉から来た考えすぎ。「下戸」を「餅食い」とは、古川柳家の憎いことかな。

52 朝顔を親仁見て居るにハこまり 五英

藤井「朝顔の息子、そと我家の裏手にまわれば、これはしたり、親仁どの丹精の朝顔の花をみてござる。これでは、こまるのも無理からぬ次第。(朝顔を監視が目当ての朝顔だったら、この親仁たではすまずまい。)

川端「朝顔に親仁の朝顔いじりは、もちろん息子の居ぬことを知っての上のこと。風雲正に急。

前田「諸説に賛成。「居るには」の調子とびびき、なかなかうまい。

岡崎・清「朝顔に説に賛。

丸・岡田「諸説につきる。

◇輪講者交代「名古屋の植植氏病氣のため、今回より福岡の岡崎氏加入。多識の氏に期待されたい。

輪講誤植訂正 (前号)

12頁三段目十九行目「可々」ハ「呵々」
13頁上段二十三行目「坐って」ハ「座って」
同下段二十九行目「傍ニリウ」ハ「傍ニリウ」



諷刺の基盤(一)

河野春三

勿論川柳の特性の中には古来抒

川柳の大きい特性として「諷刺」は昔からとり上げられているが、よく考えて見ると、諷刺という言葉アイマイに使われているものはないと思う。

皮相なウィット(機智)も、くすぐりも、皮肉も、パロディ(もじり)も、諷刺と混同されている。川柳の特性といわれている穿ちもこの諷刺とつながりがあるともいえるのである。

この事を裏返せば、諷刺はまことに巾の広いもので、寸鉄、人を刺すものは、すべて諷刺にかかわりをもっているともいえるよう。

そういう考えを押し進めると、川柳の三要素といわれて来た、笑いや穿ちや諷刺というようなのは、根本的に考えるときみな「諷刺」という大きい要素に還元されてしまいうのである。

もいえると思う。

世界戦争のような一大転換期が来ると、生活も思想も政治も経済も大きい変動をうけるもので、その過渡期の一種の虚脱状態の時にこそ諷刺文学が要求せられるのである。

私はこの世界戦争の惨禍を身をもって体験しただけに、自由をとりもどすや否や、生々しくこの国の政治や思想のあり方に批評の眼を冷たく下すこととなった。

この戦後の虚脱の中で、批判精神が、ウツボツと起ったのである。

ここに近代文学にとって「諷刺」の基盤があったのであるが、それでは果たして、現代川柳がどのように批判精神を動かし、辛辣な諷刺の矢を放ったかという点、これは問題である。

え得たかどうか、私は疑問をもつものである。

それは諷刺が単に表皮だけのくすぐりや皮肉、あてこすりに終って、もっと深部からの怒りや批評精神から発していなかったということに起因するのではなからうか。

2

諷刺は大きく分けて「笑い」の一分野である。

山村祐氏は「川柳現代」創刊号で「笑い」を

ナンセンス、ユーモア、皮肉、パロディ、諷刺

というように分類しているし

塚崎進氏は「笑いの誕生」の中で

一、悪態をつくことによって笑わせること

一、かけあいによって笑わせること

一、ウツをつくことによって生ずる笑い

一、下品な動作、下品な言葉によって生じる笑い

というように分けている。

鳥山景三氏は「笑、冗談、洒落」という本の中で

「快心の笑い、泣き笑い、哄笑、皮肉な笑い、冷笑、嘲笑、冗談、洒落」

という風な分類を行っている。

このように「笑い」の要素を各

人が分類しているけれども、実際面ではそれらは単に笑いの一パーセントとして存在するというのでなくて、互いに連繫しつつ生じて来るものと考えてよいかと思う。

川柳の方でいうと、昭和三年に出版された川上三太郎氏編著の「川柳滑稽句集」という本があった、それには

哄笑、(アハハハの巻) 嘲笑(イヒヒヒの巻) 苦笑(デヘヘの巻) 微笑(ニコニコの巻)

と四種類に分類しそれを、新川柳篇、古川柳篇、三太郎句抄の三つに編集されている。

開巻第一頁の句が、なんと

アナウンサー安米節へも様をつけ 春三

となっていて、哄笑どころか筆者を苦笑させるものだが、それはさておき、この分類においても、嘲笑という項目が、アイロニー(皮肉)とサタイア(諷刺)につながっていることは申すまでもない。

随って各人が分類している笑いの要素の中では、純粹なユーモアを除いて他の要素である皮肉、諧謔のたぐい、パロディ、ナンセンス等は大かれ少なかれ、諷刺そのものの一部分と考えられぬ事もなく、それらの要素が同時に重なりあって諷刺性を打ち出すという

ことが考えられるのである。

芥川竜之介の「河童」には芥川一流の機智と人間諷刺にベースがあるし、夏目漱石の「猫」や「坊っちゃん」にもユーモアもウィットもふんだんに盛られてい

る。
大衆芸術といわれる落語や漫才喜劇、漫画、そうして伝統川柳の中にも、諷刺や、諷刺のカケラが随所に見られよう。

人間が人間である限り、日常生活の毎日、何らかの笑いやナンセンスが転がっていて、そこに住んでいる私達人間が、諷刺を感じたり、いや自分自身をふくめて諷刺の対象になっている場合が多い。

3

ここでこれら諷刺に関連する諸要素について多少の説明が必要かと思われる。

機智に皮肉は誰にでも分っているが、パロディがどのように短詩文学の上に活かされて来たかを追って見よう。

パロディとは、「もじり」ということ、いわば「文句とり」というような意味で、古川柳では若干をうした例がある。

◇色香たへにして常の下駄にあらす

(柳多留二十首)

は、謡曲羽衣の「寄りて見れば色香妙にして常の衣にあらす……」とあるのをもじったもので、句の内容は勿論羽衣とは何の関係もな

い。

◇酒もりのいざこととはん都鳥

(柳樹拾遺十首)

これも、在原業平の「名に負はばいざこととはん都鳥わが思ふ人はありやなしや」という歌を文字つたパロディであろう。

◇いざさらば月見に飲める所まで

(柳多留十首)

は芭蕉の「いざさらば雪見にこそぶ所まで」を出典としている。

◇煮売屋の柱は馬に食はれけり

(柳多留十首)

これも芭蕉の有名な「道のべの木槿は馬に食はれけり」をもじったもので、先人の有名な歌句をもじっているところに、洒落と皮肉と機智と多少の諷刺性がうかがわれるが、これが端的に成功する場合

は稀で、大抵は低俗な、趣味な遊びになり、狂句の趣好に陥ることとなる。現代川柳ではパロディの句は極めて少ないが、私が記憶する句では昭和初期の「番傘」で

さびしさに宿を立ち出で戎橋

塊人

というのがある。有名な歌のパロディであるが、元歌が有名であればある程効果は適切といえよう。

パロディを最も得意としたのは狂歌で、太田蜀山人の狂歌は殆どパロディに終始しているが、狂歌、狂句のたぐいは最初は軽いユーモアから発展して次第にパロディ

イに刺戟を見出し、やがては文字とりの末戯に淫して墮落していったようであるが、パロディが、本来の痛烈な批判精神から生れたものであるならば、それはそれで一つの救いがあるとも考えられる。

菊田一夫の処女作「疑士迷々伝」は忠臣蔵のパロディであるが、エノケンの好演によって大いに受けたが、これは忠臣義士を批判したものとして問題になった。この芝居に盛られた諷刺と、その方法としてのナンセンスが痛烈に喜劇として、大衆へ何物かを訴えたものと思われる。

同じ菊田一夫の近作「がめつゝい奴」はこの諷刺方法を社会の最底辺の人間に題材をとって描いた喜劇で、「疑士迷々伝」の尾を曳いているといえよう。

もっと手近かなところでは、明治末年から行なわれた川上音次郎のオッペケベ節を発祥とする世相諷刺の歌は、添田啞蟬坊を経て近代の石田一松のノンキ節その他冗談音楽にまで発展したが、ここに

見られる替え歌も一つのパロディと見てよろしかろう。戦後労働者の間で歌われた「腹の底から笑うまで」「詔書」等は諷刺性の強いものだが、「予科練」「お手手つないで」などを文字つた替え歌はパロディとしてはあまり感心出来ない。「パロディは本来、深く人口に膾炙した物語りや性格やお芝居の型をもじってこそ興味があるも

のである。深く人口に膾炙しているということは、人々がそれだけに深くそれらのもつ意味にとらえられているわけだから、もじりによるナンセンス化も効果が大きいわけである」と佐藤忠男氏はいつている。

パロディが諷刺につながる最も必要な要素は単に原本の文字遊びに堕せず、底辺に社会の矛盾を衝く諷刺や、日本人の感情生活をバターン(典型)化したいた旧道徳や武士道精神や封建制度というそれらの偶像を、ナンセンス化し、喜劇化して諷刺として生々しく私達につきささって来てこそ意義があろうというものである。

ベルグソンが「笑いは必ずやある社会的な意味をもっているに違いない」といったことは、この意味では、笑いを正しく理解しているとは私は思う。

短歌の方を見ても諷刺ということとは極めて重要な要素として取上げられている。

「環」第六号第一号(近刊誌)は「短歌と諷刺」の特集号となっているが、ここで取上げられた、岡井隆、塚本邦雄、寺山修司、其の他はいずれも現代短歌の最尖端に立つ精鋭で、それらの作家の作品に盛られた諷刺が、従来の抒情性オリリーの作品とはちがって、批評精神からの暗喩にまで高められてゆくところに短歌の新しい発展が見られよう。

編集者がいうように「現代の詩は感傷だけでは詩としての使命を果たし得ないところまで来ている。そのような狭い短歌概念を打ち破るために、現代人のくらく重い心の底にもこたわっている諷刺の精神をめざめさせるために、文学の中で諷刺ということとは尊重されてよいと思う。諷刺は批評そのものではないであろう。しかし諷刺が批評の一要素とはなり得る筈である」との考えは正しく、「社会詠」という短歌壇でのジャーナリズムの取上げ方は、こうしてリアリステックな諷刺精神を、今後の短歌の進むべき道を示唆するものとして私には興味深い。(つづく)



ココロ
便箋



古きよき友の

手紙から

東野 大八



ある日突然に一通のハガキが舞い込んだ。

太田耕士からで、ひとところ、といつても終戦直後のことだが「アカハタ」にまつやまふみおと政治諷刺のマンガを書いていた画家だ。今は日本版画研究所をやっている。テレビのこどもの時間に出ているので、早速そのテレビ局に連絡をとったがナシのつづてだった。それだけに簡単な文面だったが、そのハガキを手にしたときには正直なところ胸がいっぱいになった。

戦前、大陸にいたころの若い私は、こういうとき妙な話だがマンガのグループにも籍を置いていた。飲み友達の子ナリスト連中で作っていた「トラどし会」に、マンガ家が二人まじっていたからだ。一人は東京に今もって健筆をふるい、一人は死んだが、当時地元元日刊紙に週末には一ページマンガをみんなで書いて、わずか

な心づけをもらっては酒代にしていた、それがたのしみの手すきびというわけだ。

太田耕士と奉天で出あったのは、昭和十一年ごろだったと記憶する。キャンパスと木炭だけのうすつべらなものをもって、私たちのグループの世話人をやっているデバリーの宣伝部のAのところへ立ち寄ったのが縁だ。

早速彼を囲んで一パイのみ、彼を僕のアパートへ連れていって泊めた。

東京へ帰った彼は、彼の主宰する本に、一宿一飯の恩義が一面識もない男同志で構成されたことがうれしく、私のグループの似顔で一場のマンガを描き、私については克明の描写を加えていた。

「トীগンのような顔をした川柳人で、路傍に売っていたトウモロコシを二本買い、一本を僕に与えて、食いなふるさとの臭いがするぜ、といった。そして彼の住んで

いるアパートの四階に入ると、パクパクとカン入りののみとり粉をまいて、彼が敷ぶとんに寝、私はかけぶとんを裏返したのに寝た」

（これはこんどきたハガキに書かれた往事の一文の写しである）
こんなことから私は、太田の日本人連中が経営する「カリカレ」という本の同人になった。タヴロイド判四ページの、画と文とエッチングの本であった。工場の汚い裏側が全頁一ぱいを占領していたり、豚のような女があぐらをかいて大あくびしているようなのが括けた眼の前いっぱいに展開したりしていた。前衛的なものであった。

私は専ら大陸のニュース報道と時事川柳を受けもち、最後まで雑文一本で、ただの一度も絵を描いて頂戴とはいってこなかった。画の腕前はモノの数ではなかったのだろう。

同人は太田耕士、小野沢豆、久米宏一、まつやまふみお、菊岡久利はか数人である。

いま思えば、彼等はコムニニストで、うち三人まで強烈なアカの連中がいたわけである。戦局が進展するたびに発禁また発禁で、ついに太平洋戦争直前には、太田耕士は六十五日もブタ箱へほうり込まれた。

市川彦太郎大使とベルシアへ同行するというニュースが出た直後で、その記事で私がオメデトウをいってやったときは既に拘引されてしまったあとであった。

とにかくそういう状態でいたとき、小野沢豆と久米宏一、そうして岡本という同行者に加え三人の画家が、私の家へ突如として舞い込んできた。当時私は奉天から北京に移り住んでいた。アカの彼等は日本を逃亡してきたのだ。忘れもしない北京川柳界がナニワホテル（和田黙然さん経営）で行なわれていた夜、その会場へ私を訪ねて小野沢が現れたのである。案内人を勤めた私の友人がいたことでもあるが、見もしらぬ異国の、しかも北京という大都会で、ノコノコと一面識もない私を訪ねてきたこの小野沢という男に私はまず感心した。そして一べんに仲よくなった。人ざわりはフランネルのよ

うな男だった。いすれにしても、私の前に居候三人が突如として出現したのである。当時、私の月給

は七十五円で、一人でさえ暮しが苦しかったのに、大男三人の口が前ぶれもなく飛び込んだので生活は火の車であった。やがて三月もたたないうちに、みんなトリ目になってしまった。

私のアパートは、シナ家屋には珍しい二階建てで、半洋風であった。なんでももとは学校だったそうだが、日本人のいまの家主が格安で手に入れた。二階といつても屋根裏で、部屋の半分は屋根裏の梁がななめに下っているの

で、早くいえば三角型の部屋である。広さは約六畳、そこに木製の粗末なシナベット一つ、そこに大の男が四人も寝るのだから大変だった。私は立場上、寝台の奥へ寝た。鼻先の天井の高さわずか二十センチだから息がつまりそう

だ。その横が小野沢、ベットの下の板の間へ久米と岡本がならんだが、この岡本というのが青丈が六尺一寸もある瘦せたサオ竹のような男だった。

この男は清水安三著「朝陽門外」という本を読んで感激、中国にアコガレて出て来た男だ。これも画家だ、と自称し川柳学校の出だ、といっていたが絵はへたくそだった。

いすれにしてもこの背の高い男にはまず私がヘキエキした。街のバスに乗ると、眼の前でつかい

いくと、天井にロバのような顔がこびりついていて

「やあ、大八さん」といった

「階段の向うに彼の顔がみえるだろう、そうしてそれがいくらたっても階段の上まで上って来ない。やうと足が到着したと、思ったら

「こんどは顔がない」と久米は苦笑したが、小野沢も久米も、どうも岡本とはウマが合わなかったようである。これは身長の間伸びたせいだろう、と私が解釈しかけたら

「イヤ、大陸へくる船の中で知り合った奴で、図々しくもわれわれについてきやがったんだ」と久米がこういって舌打ちした。

「うなれば二人にとってノッポは異教徒だ。」

私は三人を抱え、これじゃこちらが身がもたんと家主と交渉して、一つの仕事を作らせた。

「北京事情」という新聞を出せ、記事はオレが書き、図案は三人の絵かきを書いてくれる。

当時北京は百六十万の人口で、うち日本人が十五万いた。その上連中はみんな景気がよかったので、月三回のタヴロイド版二ペー

ジを埋める広告へのカッパだった。しまいに広告はだけで一行の記事もかかなかった日もある。家主はそれでもゴキゲンだった。家

賃はタタで、二十四人った包みに酒一升をもって、家主の阿媽さん

が月末になると私の部屋に現われた。

こうした一時期がすむと、小野沢はすぐ友達が現地に出来て、華北交通にのり、久米は愛人が出来てその庇護の下に遠くへ引越していった。私もまた満洲へ引きあげた。

こうして三角の部屋に岡本一人が残ったが、終戦と同時に彼は死んだ。日本人の焼場は朝陽門外だったので、彼は図らずも死んでアコガレの朝陽門外を出ていったことになる。「朝陽門外の檻」という一文を書いて私は原稿料十円を貰ったが、これがあとにも先にも私に報いたことは彼にとってこれ一つだった。

私が今の妻と結婚して現地召集をする日、小野沢がまっ先に駆けつけ、日の丸に寄せ書の筆初めをしてくれたが、終戦と同時に八路に走り、今もって杳としてその消息はない。

小野沢は生れおちると貧苦に育ち、画家となり細川ちか子とのロマンスも伝えられているが、シンからの共產主義者であったらしい。太田、まつやまも同様だが、私は赤い「カリカレ」の同人の列に加りながら、いまもってアカの

何んたるかも論ぜず、またそうしたものに無関心に今も過ごしてきているが、主義主張を越えて彼等を考えると、彼等ほど生きることに真剣でありその苦しみの渦

中で莞爾と笑みつつけるものはないと私は考えている。私は彼等の議論が白熱し、こ思想的な話へ幕が上がりかけると、いつもこういつてわざと退屈そうな顔をしてみせた。

「オレは左も右も大キライさ。いわんや真ん中にも興味はない。正直に生きている、ただそれだけの人間が大好きさ。オレは根っからの川柳人だからね」

いま思えばゾツとするような戦時中のアカ狩りだったが、私がいかに大陸に巣食っていたとはい



金露酒造合名会社 醸

灘・魚崎

え、イヤな取締りの手先一人現われなかったことを今もって意外に思っている。人間生きているには、時によっては場所によりけりということになる

現代柳人録

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
(四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (住) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた月日

(199) 太田 良子

- (一) 太田良子 (二) 良子 (三) 二丁目 (五) 大正十二年七月一日 (六) 福岡県 (七) 医師 (八) 六九二局一九二五 (九) こんなのが夫婦やるかと淋しがり (一〇) 日本舞踊、絵 (一一) 有 (一二) 昭和二十二年

(200) 田名部 修三

- (一) 田名部修三 (二) 修三 (三) (四) 西宮市北口町二〇八 (五) 明治三十四年十月二十八日 (六) 秋田市 (七) 阪急百貨店嘱託 (八) 西宮 (二) 二五三七 (九) 妻と居る招待席の温かさ (一〇) 剣道練士・能・鼓 (一一) 有 (一二) 昭和十四年頃

(201) 渡辺 蓮夫

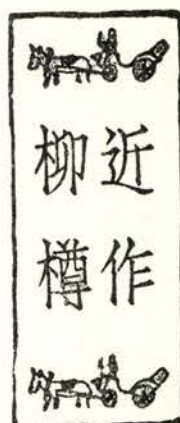
- (一) 渡辺蓮夫 (二) 蓮夫 (三) (四) 東京練馬区練馬一丁目一三八八号 (五) 大正八年八月二十六日 (六) 東京小石川水道端二の二 (七) 会社員 (毎日新聞社) (八) (九) 秋風へ日向の石も思をつき (一〇) 山・写真・音楽・碁 (一一) 有 (一二) 昭和十六・七年

(202) 阿部 柳太

- (一) 阿部竜太郎 (二) 柳太 (三) (四) 富田林市大字富田林二七一 (五) 大正八年十一月三日 (六) 堺市中之町東二丁 (七) 生花商 (八) 富田林局 (〇) 七二二 (二) 二〇六四 (九) 趣味かえて金を貯めたら死んじゃった (一〇) 旅・読書 (一一) 有 (一二) 昭和二十九年六月

(203) 野田 素身郎

- (一) 野田純男 (二) 素身郎 (三) (四) 岡山県倉敷市船倉町一二三九 (五) 昭和四年十一月十八日 (六) 岡山県倉敷市船倉町一二四〇 (七) 地方公務員 (八) (九) 夫婦養子小さな声で喧嘩をし (一〇) 野球・相撲 (一一) 有 (一二) 昭和二十五年一月



麻生路郎選
北川春渠選

観光地カメラを持たぬのが目立ち

新潟県市

小林孝正

冷蔵庫位汚職と思うてず

同

チンに似た顔もバーマをかゝる

同

わが道を行くと父親出世せず

同

浮き袋波を怖れぬ子を恐れ

同

無意識に牧師も腕の蚊を叩き

同

世話やきの^{きまめ}相場場で済ます義理

枚方市

宮川珠笑

検診を待つ間胎動しきりなり

同

二桁へもうそろばんが要る事務所

同

満員へマイクつぶれている暑さ

同

宣判貰う雑談ひまが要り

同

当てにせん政見だったが腹が立ち

京都市

大久保和三部

日めくりの格言僕もそう思う

同

引き止めてくれるつもりで捨台詞

同

理屈っぽい男論語を空んじる

同

広告のホルモン番茶で飲んで置く

同

ささやかな義理弔電で済ましおく

岡山県

秋野萩路

補聴器をつけば悪口まで聞こえ

同

恩給の増額ストも出来ぬなり

同

雨続き晴耕雨読の大欠伸

同

腕組みの中で貸す案貸さぬ案

同

割りこみをみんな視線で攻撃し

大阪市

林緋砂子

フアイトあるとみたか営業部^{にまわし}

同

なにくそと思えど今日は金がなし

同

君の名はと聞いてくれたがそ^{れつり}

同

サングラスかけて刑事も足を組み

同

糸切歯いつまで使って苦労性

京都市

小黒王石

義理で行く見合も化粧念を入れ

同

ライバルが本腰あげた業界紙

同

スト妥結次のストまでする握手

同

海綿で数える金は人の金

同

長男のズボンですこしく若がり

京都市

水谷谷水

襲いかかる姿 大大阪のビル

同

参観日妻ヒスめいて戻って来

同

柳志寸言

打率向上

本多柳志

プロ野球選手の実力と云うか能力を評価する場合のフワクターによく使はれるものに、打率とホームラン数があります。

長島選手や王選手と云った一流所にしても、打率四割はやはり困難の様であります。つまり十本打つてもヒット四本は無理だと云う事でもあります。私はいつも句会に出た場合、今日の打率は三割五分だった。ホームランは出なかったと云っては、自分で自分をなぐさめたり反省したりしているのではありません。投句数二十句で入選七句なら三割五分、天位一句ならホームラン一本といった王合なんです。

昨年の本社句会の総合成績は、出場回数九回投句総数一人二句入選五十九句。つまり打率三割二分ホームランは僅か四本と云う、誠にはずかしい成績なんでありま

す。所でこの句会の打率を良くする方法としては、勿論良句を多く投句するに越した事はないのですが、もう一つの方法としては成るべく投句を少くする事でありま

す。選者として選をする場合に相





イキしとるのにもう潮のはなし も	同	耕転機の油と酒と買ってくる	同
途中下車して迄来れば錠をかけ 竹原市	大洲大八洲	病む妻へ夕餉明るく呼んでやり 香川県	田中 彰
工事中ながらアパート皆ふさぎ	同	人使うつば心得た目の光り	同
お情けのようにひたいにキッス さね	同	成長をしたと妥協をほめられる	同
緊迫の座へオルゴール鳴りはじめ	同	着飾って見ても所詮は俺だった	同
雨降れば柱目が滲むベニヤ張り 加賀市	木村 一路	雪で梅もみのらぬ僻地グミ赤し 仙台市	平野 光道
愛情を疑がうキスは頬へ外れ	同	掃除夫となって特急の旅つづけ	同
両方の膝へ二人目もう生まれ	同	鮎買って鮎釣千鳥足でくる	同
少年A叱らぬ父と母を持ち	同	祖母がいてアパート住いに盆提灯	同
合槌へ親馬鹿なんぼでも喋る 竹原市	山内 静水	冷蔵庫の置場に困りまだ買わず 高知県	山川 勝子
小さいな親切して遮断機慌てたり	同	大鵬が負けて八百長かと思ひ	同
婿殿が今年の田植賑やかし	同	茄子胡瓜家に出来たら値が下り	同
造花にも等し所詮は人の妻	同	ちやほやとされてへそくり皆と もれ	同
兄嫁の母に尽すを見てかえり 新潟県市	安藤 桂仙	ライターが二つ出てくる醒うた服 玉島市	井上 旭峯
器用さは人にまさりてよくもどり	同	ドドンパの流行潮のように引き	同
もったいなや神 のお 屋根に草が伸び	同	看板屋原稿通り誤字を書き	同
ザアマス の 声で猫呼び犬を呼び	同	割り切って終えば女の涙涸れ	同
あやかりとうて子を抱かせてもらい 鳥取県	鈴木村 諷子	人権尊重お手伝いさんに使われる 愛媛県	村上 石峰
浴衣着て来いと螢の光りよう	同	生きる限り も やれと蟬が鳴き	同
耕転機買ったで牛がなめてくれ	同	贅沢はいうまい目が見えものが い	同

は出さな相や」と云った様な、書体から見ても句調から見ても、一目で間に合せに作ったと分る様なお粗末な作品にお目にかかる事が多いのであります。

出句数は一句でもよいから、異色あるテーマを新しい表現で詠い上げて、自分が選者になったつもりで予選をして見る位の心構えが必要だと思ふんです。斯うしてこそ打率も上がるし、自句に自信もつき結局いのちある句に一步ずつでも近づく事になるのではないのでしょうか。

いい肩をネット裏からマークされ

寸感二二三

吉田圭井堂

時代

先日大和の山奥へ行って泊ったが家の外の便所のドアに「他人様はこの便所を使わないで下さい」

車

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番



人生のトンネルを知らず山を越え	同	百葉の長なみなみ注ぐコップ	金沢市	根上	杏花
深夜放送かけて寝ているのがいい	兵庫 県	若い日を母は目に見るつもり	同	同	同
貧しさに耐えてなすが庭になり	同	夕涼み冷房きいたパチンコ屋	同	同	同
ばうばうと伸びて散髪代を飲み	同	罵ってすむはけぐちで詩も愛し	アメリカ	斉藤	流路
療養の当初家計をおもう熱	同	いつからのルンペンかしら総入歯	同	同	同
王様を裸にする気かコマージュル	松原市	お互の炭酸ガスを吸て恋	同	同	同
そろばんを弾いて智将敵を褒め	同	豪快に笑って割勘だけを出し	竹原市	杉原	愛鳩
無口だが成長株よ嫁きなさい	同	別荘を賣うた話へ暑いこと	同	同	同
豊満な胸の魅力がゴムだった	同	金ばらい集金人にほめられる	同	同	同
真直ぐに家に帰れば妻は留守	大阪市	歯車の噛み合うていてつがなし	玉島市	水粉	千翁
土佐婦省	同	雑草でよし純潔へ蝶が舞い	同	同	同
夜の汽車蛙の声の中をゆく	同	逆境へ一輪さしの花が生き	同	同	同
トンネルの数兄弟で食いちがい	同	ロッカーの鍵より口にほしい鍵	津市	嶋野ひろし	同
親しげに蚊が追いつがる墓詣	同	低姿勢叱言は耳の上を越す	同	同	同
ハイウェイ開通パレードは無事故	伊丹市	乳母車でヘソクリになる野菜売る	同	同	同
国立に昇格この海蒼さ増し	同	妻の留守子と合作の料理食べ	羽咋市	三宅	ろ亭
肉も喰わずにお野菜の高い話	同	くたびれて答案あとの数を読み	同	同	同
白檀の匂い扇子部すぐわかり	大阪市	浴衣着りや明日の予定をききに	同	同	同
ストローヘジュースの底の音し	同	父の日のビールのつ子等が買	大阪市	北中	ふじ
本拠地のナイターダンスや来る	同	末っ子も片づけ破っても怒られず	同	同	同

と貼紙してある。その課を主人に聞くと便所の汲取り賃が嵩むからとの事、何んと人肥は百姓にとつて貴重な物だと思つていたに、山奥の僻地で人肥の棄て場に困つて大都会より遙かに高い汲取り賃を取られていると聞いてあきれた。世の中も変れば変わるものです。背広着た案山子の方が効目あり

空地

われわれが九尺二間のバラックを建てても空地面積何割に引つかかつて、やれ建坪をけずれの縮少せよのと仲々認可して呉れぬが、都会の中心部の繁華街では焼けても焼けても同じ構造で同じ面積が直ぐ建っている。繁華街には空地の制限も建坪の規制もないらしい。同じ監督官庁でありながら甲の空地は自己所有の屋敷内の事を

味のこーと

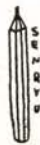
モダン 川柳

心 斎橋大丸北の辻 東へ

御 門

TEL (271) 6684

御集会には随上御利用下さい





パンザイをして末っ子は服をぬぎ 佗しきよ養老院を口に出し 金沢市	同	山本 木象	未亡人のほほ笑む意味を掴み得ず 須崎市	高橋 蟬蛇
馬も将も射す停年が来てしまい 待ちぼうけ宵待草に風も止み	同	伊丹柳瓢子	ボーナスを狙う媚態に釣りこまれ 三十のおしゃれに母は氣を使い 西宮市	栗原 光子
先代のカマド文化へ邪魔がられ 児島市	同	岡本紀太呂	ふりむかず君のまにとはひどい人 注意報あとは被害を待つばかり 静岡市	同
内職の部屋にステレオあぐらかき 思う人心にありて霧の中	同	岡本紀太呂	音のする銭でさいせん箱へ行き 行水の娘は背を向けて返事をし 大阪市	同
家元の足許たしか年見せず 羽曳野市	同	八塚三五島	病人へ小さな嘘の体温計 何万の陶器接着剤空し 香川県	同
妬くことを覚えて女強くなり 背のチャック ^{だまて} 向ける人が出来 ？、	同	野口卯之助	正直が馬鹿みる多額納税者 金一升の土地で西瓜が樽で成り 奈良市	同
生活費の統計プラスと出る不思議 今治市	同	梶川 信子	トラックから西瓜落ちそう ^{落ちそう} あれもこれも人にやってる退院日 和泉市	同
一株もないのに株の動き知り 盲腸の手術内では子が生れ 宮崎市	同	近藤 昭夫	音痴とは云わず入歯の勢にする 幸福な散歩別れる辻へ来る 笠岡市	同
無責任時代ドライな行状記 闘病の我慰めるオルゴール 岡山県	同	越智 一水	お世辞めく言葉に私の歳を知る つまさるる形見は二個の補乳瓶 京都府	同
夢だけは捨てまいたとえ不治だ ^と 男には苦勞した母娘を諭し 鳥取市	同	土岐 無極	細巻きヘライターは奉仕忘れない 靴の値を問えばソロパンのぞか ^{され} 河内長野市	同
天国に行けそうにない同士飲み 愛人が出来て肌まですぎ通り 今治市	同	森本黒天子	買い出しの荷物車掌に手伝わせ	同
農繁期ゆうべの蚊帳のままへ寝る	同			

言い乙の空地は既に建っている隣りの他人の地面を言うのか定義が違うらしい。

正直に書類を出せば不許可なり

株主

思惑が外れて下る一方の株を握って幾星霜三分の一にもなった今日、今更ら手放しでもならず泣く泣く時機を待っている大株主が居る。勿論配当なんてあろう筈がない。ところがその会社ではその株主を浮気をせぬ「安定株主」の部に入れているとは、ええ気なものだ。

塩漬けで遂うく胃腸みなこわし



タケダ薬品

●効果を
大量療法
強める

疲労・肩こり・疲れ目
脳溢血後遺症・夜尿症
便秘にも！

タケダの 活性持続型ビタミン

アリナミンで活かづくり





へそくりをするのに困り両替し	奈良県	木村よしを
裁判所笑い忘れた人許り	同	同
金持って来いと銀行ビルを建て	岡山県	永宗 宗義
暴言を吐いて淋しさのみ残り	同	同
告白をさせたいような霧ながれ	八尾市	宮西 弥生
顔色も写してほしい恢復期	同	同
還歴の女で恋の句を作り	芦屋市	里田一十
お百度に観光客は邪魔になり	同	同
松葉杖ついてもネオンの方向向き	高知市	須藤 俊江
月賦より中味にかかる冷蔵庫	同	同
達筆な妻に書かせる申告書	石川県	南 伝一
退職金目当の家がやっと立ち	同	同
宴会の酔が自腹の灯をくぐり	羽曳野市	古川 静波
冠婚葬祭妻は噂の監視役	同	同
こそばゆい勤続賞の平社員	大阪市	西本 保夫
刷替の名刺よ済まぬ平社員	同	同
幼稚園までが裏口臭わせる	広島市	上代 美文
井目を置いてる方が口達者	同	同
家計簿の赤字医療費だけはゼロ	大阪市	福富 隆子
体中油が切れたふて寝です	同	同
入墨の高姿勢なる炎天下	神戸市	大野木真砂
加害者は哀れ逃げ道指図され	同	同
悪童が転校して来た子を庇い	石川県	大山 雅城
君達の努力のお蔭と社長の辞	同	同
汗くささ氣にしてやまいまだい	大阪市	武居寿美司
横坐りそれも魅力の十八九	丸亀市	平沢柚蘭坊
市場籠夫よろこぶビール壺	高槻市	山田スミ子
農繁期あてにした嫁またはらみ	兵庫縣	斉藤たけお
おサンマがおきらいですみ上げられ	大阪市	雨森 明山
田満に行く毎日に退屈し	大阪府	石田 新石
華もって師匠の墓へ叱られに	京都府	西村句楽坊
パチンコはマニア揃いの別世界	茨木市	高木繁太郎
ゲージ家は鶏糞嗅わぬ鼻らしく	笠岡市	谷本鈍愚坊
順番を云ってはおれず娘沢山	川崎市	赤池 五朗
医者叱る無理で妻子を支え耐え	青森縣	岩淵 一星
退職金山の出物を上手く買い	七尾市	松高 秀峰
ボマードの匂い若さをとりもどし	松江市	岡崎 祥月
易者だけに妓本当の年を云い	神戸市	吉田 隆史
セールの口冷蔵庫売ってゆき	松江市	岡崎 雲美
葉桜の下を大学帽を着て	大阪市	富士 克巳

スマートで
着心地良い

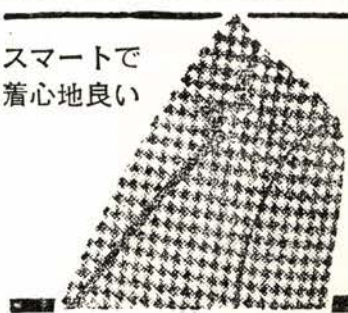
ここがあいたので

「川柳雑誌」で一番忙がしいのが路郎主幹である。朝の五時から夜の十二時まで目と耳と口と手をギョクタイして、この夏に大阪を一歩踏み出したのは京都府下長岡町へ行っただけで全く労基法の違反者だ。不朽洞会で一番忙しいのは若本多久志君で、幾回となく日本縦断の旅、東京・大阪その日帰り、何れも空の旅で、多久志君に用件があってもつかまえるのに汗だくだ。路郎主幹は静的多忙で多久志君は動的多忙である点が違うだけ。

(不死鳥)

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り





弁財天

富士野鞍馬

弁財天は印度の女神で、吉祥天女といひ、本名は能与総特知恵集大弁財天という。日本では、これに市杵島姫命を充てている。それで詠歌、音楽を司る女神とされ、琵琶を弾じ、妙音を以て衆生を喜悅させ、弁舌、福德、知恵、財宝の徳を待つた神となつてゐる。

印度の仏像では、夜叉のやうな姿になつてゐるが、日本の画像は美人に描かれ、琵琶を弾じ、竜に乗つてゐる。そして蛇をお使い者とし、巳の日が縁日になつてゐる。

弁天の産長虫がかぶるなり

(タル六四)

弁天さまだころすなと母はとめ

(七一五)

は、その蛇を詠んだ句で、

辰午の中にまします御縁日

(タル五〇)

大黒のあとを弁天五日とび

(九九)

は巳の日を詠んだ句である。

大黒天の縁日は子の日だから「五日とび」である。

天女だけ流石は琵琶の湖住居

(タル一三二)

弁天の琵琶なみならぬ水調子

(七五〇)

咲耶姫琵琶は天女へ置土産

(七九)

打波に業の音する竹生島

(七一四六)

一合は弁財天のものになり

(七二二)

これらの句は、竹生島の弁財天を詠んだもので、一夜のうち富士山が突き出て、琵琶湖がへっこんだという伝説に附会して、咲耶姫は富士山で九合、一合は竹生島というわけである。

江戸では、不忍池を琵琶湖

になぞらえ、池中の弁天島を竹生島に見立てて造られた。弁天もほこらに似せて池をほり

(拾四)

弁天は蓮華の中にお宮なり

(四四)

弁天と天神の間かすむなり

(タル二九)

弁天へ一ト月置に堅い後家

(傍四)

と、それが句になつてゐる。縁日の己巳の日は六十一日目にある。天神は上野の五条天神をいい、花の山が詠ま

れてゐる。不忍池は蓮の名所である。

江の島弁天の句も相当数詠まれ

弁天の前では浪も手を合せ

(タル初)

弁天の貝とはしやれた土産物

(七九)

弁天をつれて江の島遊山旅

(七七〇)

江の島はつつ突いてさへ行く処

(七五)

元禄の頃、奥州の盲人杉山

検校は江戸へ出て、江の島の

弁財天に、七日間参籠した靈

験によつて、鍼術の妙を得

た。その術で、將軍綱吉の持

病を治した褒美に、本所一ツ

目に総録屋敷をもらった。と

いうわけで、盲人の位階昇進

の祈願や、お礼参りが多かつ

たのである。それで「つつ突いてさへ行く所」である。

江の島へ行くが撞木の突き始め

(傍初)

盲人には、座頭、勾当、検

校という階級があつて、その

杖も座頭は棒、勾当は片撞

木、検校は撞木杖ときまつて

いたのである。

検校になるには、京都へ上り千両を納めて紫の衣を許されるのであつた。それも、千両を染め万年へまいる也

(タル二六)

紫で金沢へ来る序なり

(七一八)

紫で岩から岩へさぐり足

(七五〇)

味淋酒を上げて検校拜をなし

(傍四)

本望さ一箱すてて島へ行く

(傍三)

波の打つ音ばかり聞く本望さ

(七初)

江の島へ座頭一夜で願はどき

(タル七〇)

と、その昇格の礼参りが詠ま

れてゐる。「万年」は江の島

金龜山の洒落で、金沢は途中

の名所、味淋酒は女性の飲物

で、弁財天も女神である。ま

た一箱とは千両のことであ

る。

宝船の絵にある七福神の内弁財天はまたおもしろく詠

まれている。

弁天をのけるとあとはかたわな

(タル初)

たから船おとこの中ではじき豆

(七八八)

七人の一座古風な琵琶でしやれ

(七三六)

と紅一点を詠み、

小便に一人はこまる宝船

(タル八五)

宝船はうろくのいる神もあり

(拾四)

宝船一寸手水に川岸へつけ

(タル一〇五)

女性の弁天は船で小便にはこまるだろうとかがつてゐる。炮烙は船中の女性用の便器である。

美人の異称に「弁天」という言葉がつかわれていたので、

茶屋はみな生きた弁天様ですき

(玉柳)

弁天のようだとはいやる神楽堂

(タル五〇)

裸でもいいと弁天もらはれる

(七九)

弁天で隠居提灯燃してる

(七八五)

弁天を息子忽ち布袋にし

(七五三)

意気な隠宅弁天に寿老人

(七一六三)

等々の句がある。「布袋」は

妊娠を意味し、隠居を寿老人

に見立ててゐる。



石曾根民郎 氏に訊く

橘 高 薫 風 子

川柳は願いであり祈りである

薫風子「川柳まつりで席題「注射」の選をされましたあとで、川柳について色々お教えを戴くことは、云わば「川柳の栄養剤注射」をお願いするといったところですが……私は民郎を（たみろう）と存じていたのですが、（みんろう）と呼ぶ方もいらっしゃるようなので、今更ながら失礼千万ですが正確には？」

民郎「民郎を（たみろう）とよんでいたとしても（みんろう）とよんでいたとしても、さして苦にはしていませんが、親は小さい時から、（たみろう）と呼んで来たわけですから、本来は（たみろう）であってほしいと思います。俳句の方にも民郎という名の方もあらしく、「俳句研究」などで拝見しています。苗字の石曾根は（いしぞね）で、これは長野県だけ、他府県にはおそらくありません。すまい。」

薫風子「路郎先生が昭和十一年九月二十一日松本へ旅をされ、「雨の松本にて」というあの名吟、

遠く来て信濃に山のない日なりを詠まれました。そして民郎先生が、

師の汽車よひとしお秋を縫うてゆけ

とこれまた佳句を以って答えられ、この間、すばらしい師弟の情があふれています。民郎先生の川柳生活はその頃はもう油の乗った時期でしたか。

民郎「川柳は「川柳雑誌」百号記念の「川柳の夕」（大阪朝日会館で開催）に出席しようと思った時が、そもそも手を染め出した頃なのです。昭和四年位からです。その頃の川柳塔に活躍されていた、町二・革郎・刀三・愚陀・乱靴・山雨楼等の諸氏の句はすばらしく、現在の川柳塔とは又違っ

た張りのある雰囲気でした。例えば町二氏の

大阪に暮き空ある日なしさびしの句などに感銘したものです。その初心時代に受けた感銘というのは、作家の内部に何時までも残っているものです。

薫風子「その頃の川柳塔は充実そのものでして、古い雑誌を見ていると私もそういう感じをひしひしと感じます。よき土壌ではぐくまれた訳ですね。民郎先生は何時作句されますか。路郎先生は夜か、朝起きた時だといわれていますが。」

民郎「気まぐれの方で、昼間のときも夜のときもあります。さし迫った場合が多くて、切を余儀なくされるわけですが、概して静かな夜を選んでいます。気持のおちつき、気持の正しさというものが作句のきつかけを作ってくれるのではないのでしょうか。大阪のよう

な騒音のところでも、田舎の空気の澄んだ信濃であろうとも、それは心のありどころにあると思っています。句に徹するということ、これでありますようにね。

薫風子「民郎先生の現在の句は例えば路郎先生の句が背筋の通ったすっきりと坐りのよい句とすれば、何か、崩れんとする一歩手前で踏み止まった微妙な調和の美を私は感受するのですが、川柳塔に投句され始めて以来、種々の変遷を経てのことでしょう。熱のある作家である程、自分の境地を押し進めたいと努力しますが、余りに新奇に陥ちいった場合、こういった遍歴は無駄に思われるのですか……」

民郎「私の作句生活は長いようでもあり、また短いようでもあり、いたずらに長いことだけで泰然自若ともしてはいられません。芸術の生活ではこれで極地、これで絶頂ということはいえません。一日一日が歩みで、若しみて、しかも励みであるのです。悲願でもあるわけでしょう。殊に川柳生活に於てはそれが言えるのだと思います。薫風子「仰せの通りだと思えます。」

民郎「『川柳雑誌』に初心を育てて貰ったということがひとつの作家的な宿命ではないでしょうか。川柳の芽をむしりとられず、川柳の芽を可愛いがって貰ったよい印象が、その後の成長に非常な影響を及ぼすものです。」

薫風子「そういったところから

作家の個性も押びてゆくのだと思いますが、個性ということについて。

民郎「個性ある句を作れこれが私の教えられたモットーでした。誰がいうことなしに私の胸に刻みこまれた識語だったのです。たった十七音律、これを駆使する上からは、何が何でも張りのあるこの人でなくてはならない個性のこもった句風を自ら学びとることを信条としなければならぬのではありますまいか。ともすれば自己撞着におちいり自己満足に墮しやすいつと何を何とかセーブしながら、句本来の普遍性に努めてゆく意欲はありたいものです。」

薫風子「個性が出ましたので。故豆秋氏の個性のすばらしさはよくいわれますが、私は牧四方という作家の作品、それも多くは知りませんが、大好きなのです。」

民郎「四面楚歌と指相撲していたりの句はすばらしい四面楚歌という語彙を用いてあれ以上の句は出来ない、三浦三朗君あたりはつきり迷惘しているほどです。薫風子「私事になりますが、四面楚歌故郷は豆の花の頃の句は、四方氏のこの四面楚歌という語彙が常々頭にこびりついて、折りにふれて発想にまで形成されて来たのですが、四方氏の多少の句を読んだとき、成程四方氏は言葉・語彙を厳しく選択されているなと感心しました。そして

兜町天に睡して人去れりなどの佳句に接しますと、もう故

人にはなられましたが、一度お逢いしてその人柄に触れ、色々教えて戴きたいなあとと思うのです。

民郎「四方さんは妥協をしない性質の作家でした。横浜の人ですが、ある時大会があり、柳人数名が或る旅館で宿泊したことがありましたが、四方氏だけは何か気に入らぬことがあったらしくうい出て行かれる、そういう方でしたが、句も厳しい高度な作品が多いです。

蕉風子「東京の作家の作品は目に触れる機会が少いのですが、私は中野懐窓氏の作品も好きです。民郎「この方も横浜の人です。近年眼を悪くなさってお気の毒です。川崎に「白帆」という柳詠があります。句風が変わって君には勉強になると言うから送ってあげよう。

蕉風子「ありがとうございます。お願いします。民郎「四方氏の「四面楚歌」の句も良いが、花又花酔氏の、生れては苦界死しては浄閑寺の句も忘れられない。

蕉風子「江戸の風俗詠の古いしみが感じられますが、特殊な境遇の女性を詠んで哀れが深いですわ。

民郎「職業は役者の肉襦袢を描くという特殊な技術を持った職人的な下町気質の作家でした。句にも江戸の名残りのしゃきつとした姿勢が感じられる。私はいつでしたか、品川陣居さんに浅草の花街やらへ連れて行ってもらったことがあったが、浅草の外れの浄閑寺

へも行きました。それは淋しいところですよ。今の句など古川柳と現代の川柳とのつながりを感じさせ

蕉風子「古川柳の味は世相人情の味、文字言葉の味にはかなりませんが、今月、現代仮名使いや、当用漢字の制定で表現に非常な狭隘さを感じます。民郎先生の句を拝見していると、平仮名を多用してやわらかい艶のある感じを出していられたり、常に工夫をしていらっしやいますね。

民郎「工夫をしようというのはないのだが自然に出来てくる。そのように頭の中に浮ぶというのが正直なところですよ。

蕉風子「成程自然のままな訳なのですか。先生は常に多数の句の選をしていられます。都会の作家、地方の作家、老若男女と種々な作家の句、これはもう一目瞭然で分別出来ましようか。

民郎「名前を伏せられて、これは男か、女か、都会の人か、地方の人かと問いつめられると当惑します。そういうことは私は到底不可能です。私の選に長くゆだねてくれる作家が一度も会ったことはなくても、その境遇や生活を句の上で知って、親近感を覚えることはあります。度合いによつて然と選に当るべき自分になりま

す。自分の句は自分でなければ作れないのだという自負は常に必要です。作家は自分を大切にしたいものでありますね。

蕉風子「作家を育てる、個性を伸ばすという選のあり方は大選者

の風格でもあり、使命でもあると思われませんが根気の要ることでしょうね。又、選を受ける立場からいっても、これと見極めた一人の選者に個性を伸ばしてもらおうというあり方が大切だと思うのです。

蕉風子「どの柳詠にも顔を出している作家、それはよいとして、各柳詠の傾向におもねる句を種々雑多に作句している作家を淋しいなあと私自身見えています。選をしていられると変ったことにも出くわすことがありでしょう。

民郎「選者を大勢の前でためすということではこんなことがあります。川上三太郎さんが語られたのですが、ある地方の大会へ出席して選をして披露しますと、「その句は誰々の句だ。既に発表済みだ。けしからん。」と選者をからかう。この人は自分で作らずにどこかで発表になった他人の句を敢えて投稿し、万一発表になるとこのように選者を愚弄するのです。困ったことですね。

蕉風子「それはひどい。前衛的な抽象句の選も難しいと思いますが、鑑賞も甚だ難しいものがあります。やはり、何べんも何べんも読んでいううちに何かを掴むはかないのでしょうか。又、私は現在十七音字からは金縛りのような窮屈な束縛を感じ始めているのです。

民郎「抽象・具象、伝統・前衛で討論が盛んそうですね。鑑賞と批評は違ふのですから、たとえ場違いの作品でも鑑賞するだけの度量はあってほしいものです。作

家は句を提示しているのですから、享けて起つてこれを味わいたいと思います。

蕉風子「私なども咀合いが違う句は毛嫌いする傾向が強くなりまして……。

民郎「国文学解釈と鑑賞昭和三十四年十二月号に「現代川柳結社一覽」をたのまれて執筆したことがあります。

蕉風子「ありました。各柳詠の表紙の写真も挿入されていて……。主宰の言葉もあつた……。拝見しました。

民郎「雑詠の傾向、いわばその雑詠で主張している句風というものをも三つに分類して見ました。維持派、弾力派、特異派で、維持派は現状を保持せんとするもの、弾力派は現状を打破し訣別するには到らないが、維持派とは異った作家としてのねらい、作品の色合いを持つもの、特異派は十七音律に

あきたらなくなつて勢い句のスタイルの変革、破調に急進するもの、或は十七音律は許すが、やや作句以前の構えに執着するもの、それに事実と

しての本来の自由律を主張するといった分類です。この分類をついた私は私なりに主張と抱負をこめて今後とも句と闘つてゆきたいのです。川柳性から逸脱することの恐れ、片方ではそれが進歩である主張する。どこまでが川柳性があるのか。それでは困るといった意見も出て来るのですが、いずれにしても句を作るうえで作家的な意欲は許さるべきでありまして、それが埒外のものであるかどうかが問題となると思います。敢えて十七音字にこだわる必要はありませんし、十七音律といったものではないのはありますまいか。でも最作二郎さんのような長い型のは私には喰いつけません。私にもう少し時日を与えて貰いたいと思うのみです。抽象句にしろ、自由律にしろ、共鳴する人があるだけに、私は私なりに勉強しなければならぬでしょう。

蕉風子「進歩的な柳詠の存続は





川柳

名句と難句

麻生路郎

〔五四三〕
団地族天に向って呼び降り

(喜由)

「天に向って」は少し大げさだが、誇張法の句として面白い。

「中村クン、風呂へ行こうか」という声が雲を抜けて響いて来るのもうれしいではないか。

〔五四四〕
割り込みへ顔を上げしげ見
てるだけ

(東岸)

近ごろは一寸したことに、ナイフでブスッとやるのが流行る。だから割り込みがあっても「君子は危うきに近寄らず」と悟ったのかムヤミにとがめ立てをしない。卑怯だと云えば卑怯だが、ただ、その男の顔を「しげしげと見てるだけ」である。

〔五四五〕

恋人とショパン聞く破目喚
うばかり

(彰)

音楽好きの恋人につきあってショパンを聞く破目になったが、音楽の耳を持たぬ悲しさはタダ煙草を喫うばかりだったと詠んだもの。趣味の違ふ恋人の心理を巧みにつかんでいる。

ショパンはポーランドの作曲家、ピアニスト。ピアノの詩人といわれ、楽器の美しさを最大限に發揮させたピアノ音楽独自の領域の開拓者だとのこと。

〔五四六〕
西成界わい
チンジャラジャラ臨月の腹
前に出し

(満潮)

いかにも、西成界隈らしい風景を巧みにとらえている。

夫はいつ帰って来るか判らない。イヤ腹の子も、今の夫の子だかどうだかそれすら判らないのである。僅か百円つかんだら、もうパチンコの前に立つのが第二の習

性になっているのだ。「臨月の腹前に出し」は情景を浮彫りにして見せる。この句の場合、パチンコと云わず、チンジャラジャラと音で感じを出しているのもいい。

〔五四七〕

長電話うどんがのびますと
も云えず

(生々庵)

電話は僅な料金で、居座ったまままで用が足せる点はまことに便利だが、こちらがどんなに忙しくて寸時も手が離せぬ時でも引張り出されて受話機を握らされる不便もある。

この句はうどんが来て、まさに箸をとうとうとした時に、電話がかかって来たのである。第三者から見れば、すこぶるユーモラスな状況ではあるが、アタマがうどんにいっている人へ長電話とは殺生な話だといわねばならない。実感をそのまま句にしたものであろう。

短いようです。川柳の文学性と大衆性」ということを考えさせられます。一方、俳句の芭蕉にしろ、川柳では路郎先生の句集「旅人」の句にしろ、高度なものと大衆性とは立派に両立して行くと思うのです。この「文学性と大衆性」について少し。

民郎「川柳の文学性と大衆性」ということは案なようにいてむずかしいものです。私は新聞柳壇を受け持て選をしているのですが、川柳を大衆の場に提供している点、川柳のPRになるし、また作家をふやすことになる。ありふれた句だけを並べれば無難なようですが、少し目の肥えた人や川柳作家が見ると、何だ、これでは低俗化ではないかと言われる。又ちよつと角度の違ったものに目をつけて、これはむずかしい、わからない、川柳は大衆詩だ、大衆にわからないものは川柳という枠からはみ出したものだから除外すべきだといって寄こす人がある。私は思う。こびることもなく一般を向上させる。徐々に視野を高めるように読者を誘導すべきである。読者を川柳人の方でいさなつてゆく。それだけ川柳人は責任があり、誇りもあるわけですね。

蕨風子「これも時日と川柳家の努力の積み重ねが必要な訳ですね。先生は時事吟や社会性の句を作句しようとして配慮しておられますか。

民郎「民郎の句は生活が背景で、チクリと社会諷刺の時事吟が

少いから、もう少し高所から起つて発想しなければならぬと、率直な提言をしてくれる人があります。

蕨風子「高所から起つての社会諷刺、成程と思います。ニュースを追うだけの時事吟ではつまらない。今度は推敲についてお伺いしますが、路郎先生は著書「川柳とは何か」に、唐の詩人杜甫は作品の推敲推敲のため肥えられなかったのだということを書いておられますが。

民郎「推敲は大切ですね。私などなかなか句が出来なくて苦吟してやうといひぞ、出来あがつたぞと嬉しい気持ちを押えて、また推敲します。推敲しすぎて却って原句より駄目になってしまうこともおそれたりします。

蕨風子「最後に、後輩というか、同じ不朽洞会の後進に、これという指標になる言葉、そして、民郎先生が川柳作家として常々大切だと思っていられること、それをお聞かせ下さい。

民郎「そんな大それたことは言えません。まだまだ幼稚で、いつまでたっても句が上達せず、大言壮語はおもはずかし、大みえも切られませんか。「川柳は願ひであり、祈りである。」という言葉、私自身に言い聞かせています。

蕨風子「ではこの辺で。すばらしいカンフル注射を、どうもありがとうございました。

(昭和三八・七・七)

〔五四八〕

面接試験猫がネズミをなぶるよう

(方大)

面接試験は、されるものにとつてはまことに、おっくうなものだ。何を訊かれるだろう？ 万一知らないことを訊かれたらという不安があるからだ。

役目だから仕方がないという訊き方をする人もいれば、まるで猫がネズミをなぶるように、意地悪い質問を投げかける人もいるものだ。この句は後者の人だが、こんな人に当たら試験を受ける側は不運とあきらめるより仕方があるまい。

〔五四九〕

ズバリその太さを見せたシームレス

(春雄)

それだけのものだといえ、それだけのものだが、女の姿に、時代の変遷を見せた句として捨てがたい。脚だけ描いて、肉感的な女が浮かぶからだ。

シームレスは縫い目なしという語だが、主に長い靴下の後ろ中心に縫い目のないものをいっている。

〔五五〇〕

金魚鉢狭けりや狭いよに泳

き

(花村)

金魚鉢に金魚、それは人間にとっては余裕だが、金魚にとっては生活でしかない。金魚鉢が狭ければ狭いように泳ぐより仕方がないのだ。人間も又そうだとの諷刺句である。

〔五五一〕

生甲斐は三面鏡のなかのひと

(潮花)

アパートの二人の生活か。女は三面鏡に向つてお化粧に余念がない。

男は女の行動から寸時も眼を放さない。フト三面鏡を見ると、彼の女がおえんだのである。たつたそれだけでも生甲斐を感じたというのだ。この二人、いやこの男に多幸あれと言いたい句だ。

〔五五二〕

神様が御存知ですとなほ頑固

(好郎)

事件の内容は判らないが、何をいっても一切うけつけないのである。

神様がご存知ですの一点張りであり、頑固そのものである。頼りない人間も扱いにくい、この種の人間は更に扱いにくいものだ。

〔五五三〕

一面に似顔載るよな友もな

(宏方)

新聞の一面には、池田勇人や大

野伴陸のような一流政治家のカリケチュアがちよいちよい掲載される。

それをジッと眺めた庶民生活者の述懐である。

同じ人間に生れて、こんな人間をオイと呼ぶような友もないのは、どうしたわけであらうか。日を社会の隅でアセク暮らして、人の知らぬ間に死んで行くことかと思うと、何んとなく淋しい気がするというのである。

〔五五四〕

良心が少しありそにホテル出る

(阿茶)

ホテルの種類もいろいろあるが、この句のホテルは俗にいう連れ込み宿のことであらう。

赤線の灯が消えて以後、この種のホテルは軒を並べた繁栄ぶりだ。近ごろの若い二人にとっては天国でもあらうが、中年過ぎには多少旧道徳を身につけているだけに、前後左右に眼を配り、一人ずつのがれ出るように立ち去ることを「良心が少しありそに」と詠んだのである。

「少しありそに」で、情景がいきいきと眼に迫ってくる。

明治・大正柳誌巡礼

奥津啓一朗

大正元年(一九一二)

十月一日、川柳文学、第一輯、菊判廿四頁東京市日本橋区蠣殻町三丁目一番地川柳文学社発行、編集発行人越元次良、坂井久良岐主宰、一部拾貳銭。

久良岐(川柳文学の首に) 岩本震五子(天明柳壇の別働隊) 秋の屋(陳套小解) 三樹園赤城子(新随隨隨筆) 篠原春雨(田舎者の見たる東京) 栗林古雅(古川柳に現れたる死の觀察) 雑誌久良岐評其他が載っている。

久良岐の「川柳文学の首に」の一節を抄録しておく。

川柳と狂句の黒白に明にせられ、可笑味とクスグリの区別判然たる今日、現代の川柳界には狂句と称せる者は全く其影を潜められど、此反動として新傾向と主へる主観点十七字流行するに至れり、是蓋し我等が六七年前に「五月鯉」の一面に新十七字詩として唱導せる系路を遂へる者なれ共、我等は尚「五月鯉」の一面の主張なる古川柳研究を主唱して「獅子頭」に於いて奮闘を辞せざりき、是れ自覚の川柳界に必要を感ずること切なりし爲なり、何をか川柳

界の自覚といふか即ち古川柳の風俗言辭を研究するの結果、其根底に横はる江戸趣味の大精神を普及せしめるの要を認めたるものにして、是れ其名は江戸趣味なれ共、実は大日本帝国が古来二千年蘊蓄せし文明の平民的に発達して至純至正の国民性を發揮したる者なればなり、(中略) 栗林古雅君志古道に存す、即ち「川柳文学」の発刊と爲り、余に助言者の地位を授け云々

とある。(河相すすむ氏蔵)

大正三年(一九一四)

九月十五日、大正川柳、第二十六号、菊判三十二頁、東京市芝区下高輪町五十五番地柳樹寺川柳会発行、編集発行人井上幸一。

柳樹寺剣花坊 命呪ふ蛭魔の沼のめくら魚

秋にふさう蚊よ平打の水芭

佐々木左右

蝶さびて虞美人草へ恋はかな 井上剣花坊(川柳講説)が載っている、編集主宰井上剣花坊、担任鈴木すず六、吉川雄子郎とある。(落合行詩堂氏蔵)

(つづく)

評句

レリ



京都市 岡山市 加賀市

平岩 司郎
辻 圭水
光好 陽子
那谷 光郎

空氣の重さよ軽うじて生きる身に

一鶴

司郎——この句「軽うじて」が「ようやく」の意であれば「辛うじて」であるべきだと思う。重さと軽さの対比の為の「軽うじて」であればそんな狂句じみた遊びは私は敬遠したい。たしかに人生の重荷が遂に空氣にまでも及ぶことは、よほど深刻であるとは思いますが、もう一つ、もてあそばれた知恵である様に受け取れる。作者ご本人はそれ程人生の重荷を身をもって感じていられない庶民的なゆとりをお持ちだろうと感じた。もって人生の皺を感じたい。

圭水——自分の実力は自分が一番良く知っているのに句評などは荷の重いことはよく承知している。又初めてであるので一生懸命しているということでお許し願いたい。

司郎氏の「辛うじて」に全面的賛成。作者の事は知らないが恐ら

く大病で入院中か或は大手術をした体験にもとづく切実な気持がこの句になったと思う。健康体のものでは想像することもできぬ句である。何とも云えぬ迫力があり深刻な良い句であると思う。破調が破調と気づかせぬほどの句である。私の好きな句だ。

陽子——この句の軽うじては辛うじてと解釈したいと思います。つかんでいるところは圭水さんと同じく大病をしてたで生きているというだけの自分が空氣の重さまで感じる人体のあわれさというのでしょうか生命力の切実さが深刻に表現されています。

光郎——軽うじては当然辛うじてでなければならぬ空氣の重さよを空氣が重いとかが軽いとかと思っただけの別な表現が欲しい。私は敢て大病又は大手術の場合ばかりを考えない、事業に失敗してどん底に落ちた生活をして、こんな句が生れるかも知れない。ですから

らもっと具体的表現が欲しい、私にはそう切実な気持が浮んで来ないのが残念だ。漠然とした思いである。此句詩情情緒があるなら、作者の体験でなくとも、作句し得るであろう、激賞しない所以である。

司郎——お気の毒な療養生活者の句とは夢にも思っていないせんでしたので、闘病途中の実感であれば、胸を打つものがあります。だからそれ以上「何をか言わんや」であります。私はどこまでも人生の重荷であってほしいと願っているのは、この様な深刻な題材に取り組まれた作者に次の句を御期待したいと願っている次第です。

圭水——光郎氏のお説の事業に失敗してどん底に落ちた生活とすれば空氣の重さということよりもっと変った切実な読み方がでてくるところが……私はあくまでも病氣と解釈したい。私自身こんな経験がないがこの句に心強くひかれる。

陽子——私には作者の生きたいという希いが切実に感じられます。詩的なところもありますけれど。

光郎——病氣によって辛うじて生きる空氣が重く感じられるのならばもっと別の表現であって然るべきと思う。その点句意が漠然としている、一考を要すると思う、肉体的即ち病氣、精神的即ち生活の苦境両方とも歎息をもらすことがあり得る、歎息は重苦しい、皆さんそう思いませんか。だから句意が漠然としているというのです。

で私にはそれ程深刻さが感じられません。敢て言わしてもらえば療養生活者の場合ならそれこそもっと適切な表現方法を見つけたいものなのです。例えば病に苦しむとか、喘ぐとか、病床にある表現が欲しいところです。

ドドンパに菊正の味判るま

い 清潮

司郎——川柳味はおかげで判るように思う。私自身、ドドンパのリズムは大変心を打たれたが、菊正宗の味は未だにわからんのである。わからうともせんし、わからなくてもいいのだ、ドドンパ族に菊正の味が判ってたまるものかというのである。しかし

菊正にドドンパの味わかるま

と逆襲されることは間違いないし「明治は遠くなりけり」と嘯いてはおれないのではないか。

圭水——飲めぬ私にはつらい句だ。

何でもあちら風のもをそれとも深入りすることもなく、うわべだけをとりにいれてまねている者に純日本的なものを対比してそれをドドンパ、菊正に代表させたとか解釈してはどうであらうか？ 昔からの日本にあるものにも何とも云えぬ味わいのあるものを作作者は若い人達に訴えているのではなからうか。

ドドンパも菊正も動くのではないか。

陽子——ドドンパは現代つ子、菊正は四疊半で三味線の音にうっとりと盆をかたむける、明治と昭和のちがいが、考えることもやることも雲泥の差、作者はおそらく明治が大正初期生れの人を想像します。何か私もこの句に相通じるものがあります。

でもドドンパの世界もちょっと知り知ってみたい気持がします。

光郎——司郎氏の逆襲云々もあり得るしそれでも句が成り立つ、私などはいつも古い古いと子供達に笑われる、ドドンパと菊正とに時代を代表させてあるが、圭水氏の言われる様に私も動くなアと感じました。もっと適格な代表がないものか、此句は此句で我々明治時代の人間にはよく解るが、これ

では宇宙時代に遅れること必至だ。然し私としてはやはりドドンパやツイストは嫌いで仕様がなない。菊正の味はつきり理解出来るから、でも近來はビール党になりました。明治と昭和中間、大正ですね。

司郎——川柳はこれで良いのかもわからないが、当年五十三才の私には、どうももう一歩川柳らしさから脱出して頂いたらと願うものです。柳壇の向上と言ったことはどうでもよいのかもわからぬが——又えらそうな事も言えませんが、約三十年前の馬行、春三、町二、愚陀、乱耽の華やかなりし頃の「川柳雑誌」がなつかしくなりません。事実私はお酒の味は知りませんが長男高校三年の買ってくるポヒュラーソングの中のチエベイチツカーの「ツイスト No. 1」やレイ、チャールズの「旅立てジャック」等にはシビレル様な好きを感じ毎日曜の朝は五曲ずつ聞いています。だから、折角私の好きなドドンパを作句の対象にして呉れるのなら、何故、心をゆさぶる様な句になって表れないのか、と願ったのは無理だったのでしょうか。

圭水——時代の違いはつねに川柳界に材料を提供してくれるのであるがそこに新鮮味あふれる川柳が生まれてくる。次から次へと新聞紙上にあらわれる新語にも必ず

川柳家は川柳をつくり楽しんでるのではないだろうか、又泉の如く川柳のつきない所以だと思う。ドドンパもやがて古くなると今度はドドンパが古い代表で読まれるであろう。

陽子——私の小学校の頃に修身の時間がありました。戦後は姿を消しました。子供達にお母さんは古いとよく言われますが時代の波に取り残されてはいけないと思ひ出来る限り本を読んだり、見たり聞いたりしてはいますがなかなか古い教育が私の中に根強くあぐらかいていきますので百八十度の転換をして行動に移すことにためらひをおぼえることがあります。やっぱり私は日本の古い女なのでしょう。時には子供たちにモダン婆さんと云われることもありますけれど。

光郎——圭水氏の言われる様に時代は移って行く、川柳もそれに応じて変わって行く。それが当然と言ひながら、唯道義に反することのあまりに多い世相に、われわれ古い頭のもものは反発せずに居れない。

若い女性に「キミは全く純日本的な女だね」と言ったら恐らく好意的な返事はしないだろう、唯新しがりや、振ったり事の善悪の区別もせずに行動することが多いやなのだ。

ドドンパをやる人でなければそ

の面白味はわらないし、菊正を飲む人でなければその味はわからないのが当然だ。味がわかるまいと見栄を切る程ではないんじゃないか、然し新しいが事をばかりを能とするのをいましめる意味なら事足りると思う、あえて秀句とは言わぬが。

灯を消して明日の手順に駄目を押し 代仕男

司郎——寝についてグッスリ寝込む前のほんの一時時ではあるが、心に念を押す姿は確に体験からうなずかされた。誠に飾り気のない生活描写である。之れを、自分自身の心に念を押すのでなく、灯を消してから尚大声で駄目を押し、納得する返事があつて初めて寝るのは、句材としてつまらぬと思う。やはり気持ちの整理を自分自身で念を押す場合と見たい。

圭水——作者は余程忙しい仕事をしている人で、すこしでも手順が狂うと、大げさに云えば一日が駄目になるので灯を消して寝る直前にさえその事が頭からはなれず何時から何時までこうして、何時から何時までどこで誰と商談というように駄目を押したというのであるが秘書のいる社長でもない立場がよく分る。サラリーマンであれば仕事に熱心な人、しかも句そのものは強く感じない。

陽子——この作者は非常に几帳面な人と思います。句そのものは

平凡ですが手順よく一日を有意義に使うことに尊敬をおぼえます。

光郎——灯を消してとあるから自分自身に駄目を押すと考えた方が至当、家族のものに駄目を押すなら灯を消さないうちにするにしよう。明日のスケジュールを寝につく前の一時念を押して見る気持は真面目な人が、毎日変化にとんだ人の多忙な人がやることである。又段取りをせぬと仕事はかどらぬ人のやることと思うこの句月並な感がある。ただ灯を消してに生命があるように思う。司郎氏の言われる贅意を表するがただそれだけに終っているのは何だかもの足りない気がする。

司郎——之れは恐らく作者自身の体験句であると思う。だからその点、自分を偽っていないのが心を引く、月並みな感じよりも、私はむしろ、一日の終りをつかまれない、思いすこしだらうか、たしかに、深刻に見て貰えなない掛な句である様に思う。

圭水——句意は誰もが想像される城を出ていないのでみなさんのご意見で云いつくされているのではないのでしょうか。

陽子——司郎さんのおっしゃっていることと同感です。

光郎——明日のスケジュールと瞳をつぶって繰り返している姿が

眼に浮ぶが、表現に迫力がないから、どうしても切実感がない。医局の実験室生活をした私には、句の様に駄目を押すことが毎夜であったせいか実感ではあるが感動があまりない。私には実感だから当然感動が湧かぬ所を見ると、やっぱり句の表現がもの足らぬのではない。こんなえらそうな事を言っても、私にはよい表現方法が見つかありません。私にはあまり平凡すぎる実感は句にならぬのではないかと思ひます。ご教示を乞う。

はねられた人の生命を値踏みされ 満 秋

司郎——人の生命が値踏みされたのではないのか。「人の生命を………され」の「を」であれば「する」とすべきでないか。ともあれ川柳作家はこんなつらい句も作らねばならぬかと思うと情けなしくもあり又、それが為めにやめられぬのではないかと感じた。しかし何事も金で勘定する人間の悪い癖とは言へ、厳しい川柳人の目だと思ふ。「ケシカラン」との叫びを、もう一つ感じないのは、私自身の性だろうか。

圭水——毎日のように新聞紙上で交通事故が伝えられているが事故の当事者でないものの考え方ははつきりと句にあらわれている。「が」と「を」は司郎氏の説に賛

成。當時者に見えればなぐられそ
うな句であり事故の現場写真をと
る新聞記者さへ想像される。第三
者としての無責任さ、をつくづく
感じる。司郎氏のいう「ケシカラ
ン」という気持は私も同じく身近
に事故を体験せぬためか起らな
い。

陽子——お金では買えない生命
が交通事故にあえば新聞紙上へい
くらいくらと派手にお金に換算さ
れます。たったこれだけの価値の
生命なのだろうかと思いがするこ
とがあります。交通事故ではない
が事故の体験をもつ私は結局事故
当事者が一番損な立場にあること
を云いたいのです。人間の情感の
存在がだんだん無視されてゆくさ
びしさをこの句に感じます。

光郎——人間の生命は金に換算
されないし又換算すべきものでも
ない。然し事故が起きた場合それ
では如何すればいいか、やはり金
銭的に解決するより方法がないの
ではないか要は被害者に加害者が
誠心誠意で臨むか否かにあるの
で、これがないから命が価値みさ
れたと憤慨する訳である。

この句の生命をはがの方が私も
よいと思う。川柳作家はこの様な
構成の句は安易に作れるかも知れ
ないが着想の如何に依って句が生
きたり死んだりするのではなから
うか。

司郎——それにしても「いや」
な感じの句材ですね、しかし川柳

人はやはり、こうした社会批判の
出来る必要があるのでしょう。
だから辛いとも情けないとも思
うし、又圭水氏の様に記者の冷徹さ
も必要であるんですね、私には到
底作句出来ない境地です。この
句

生命を価値みする。

として頂いて、「価値みすると
はケシカラン」と道義的憤慨を読
者に共感せしめてはしかったと私
は思いました。

圭水——私は南海に勤めている
関係で事故ということに対しては
人より注意をし又多く見たり聞い
たりしている。一旦事故の起きた
場合、肉親の悲しみをよそに第三
者の姿にもよく接している。この
第三者の気持をズバリと云いきつ
てしかも「ケシカラン」という気
持を感じさせないのは作者の非凡
な作句によるものだろう。

陽子——皆さんが思っているこ
とをみんなおっしゃっているの
何も申し上げることはございませ
ん。全く同感です。

光郎——司郎氏の価値みすると
はケシカランの気持が言外にあふ
れているから生命が価値みされて
充分だと思ふ。私は此点圭水氏
と反対です。それは鬼に角とし
て、

葬式へカメラを向ける程に
疑り

まどか
の様に第三者とすれば口では同情
の言葉を儀礼的には吐くが痛くも

痒くもないことだから、平気でい
られるのだろう。然し心ある人な
らばケシカランと憤々する筈だ。
第三者でも。此句現代社会批判
のものとして上乘なものと思考す
る。全く皮肉な句である。

くたぶれた顔していても女
将なり

春 葉

司郎——「そうですか川柳」と
して片付けてもよいのではない
か此の川柳の境地で悠々としてい
られる人々の幸福を破りたいとは思
わないが、襟をかき合せて思わ
ずウナリ声が出る様な名句の洗礼
を受けたと思う私には、もう一
つのたりない着材である。

圭水——女将となるまでの苦勞
が顔ににじんでいるのであろうが
作者は女将と呼ばれる婦人にはど
こかピリッとしたひきしまった顔
を想像したので一つの発見として
この句が生まれたのであろうが春
葉先生の句にしては平凡な方であ
ろう。路郎先生がいつか南海句会
で「いつもいつも名句が生まれ
るのでなく苦を作って楽しむの
だ」という趣旨の事をおっしゃい
ました、くたぶれた女将も見逃
さずに句にされたことがよく解り
ます。

陽子——女将となるまでの茨の
道、女の世界も殿方の想像よりも
っと深刻です。パトロンがあつて
楽々と女将になる人、自力でここ
までこぎつけてきた女将、この句
の女性はどうな道を選んだ人なの

でしょうか。はてな？ 何か物足
らないものがあります。

光郎——女将になるまでの過去
の苦闘でくたびれた顔と見るよ
り、現在に於ける経営上の苦境
か。或はパトロンとの愛情の問題
かに悩んでくたびれていると見た
方が適切ではなからうか。この内
面的な苦悩と女将になるが故に発散
させたくない心理がくたびれた顔
になっているのではないか。そう
いう風に憶測するとこの句が生
てくる様に思う。私としては決し
てそうですか川柳ではないしく
味わえは微苦笑が自然と湧いてく
る感がする。わけてパトロンと若
いつばめとの恋？の葛藤でもあれ
ば尚更くくたびれた顔になる筈、そ
れを女将という自尊心が平気を装
うている様にも思える。そして女
将の地位にあっても果して幸福か
どうか、内面の苦悩は他人は知ら
ない、こんな事は世間に知らにあ
ることなのだ、私はよく諷刺の効
いた佳句だと考える。

司郎——各お説は充分にわかっ
ております、しかし大正の初期か
ら現在まで川柳人は何人いたのか
知りませんが、それ等の川柳人が
当然作るべくして作らなかった
「女将」だったのでしょうか、何
回となく何人となんく作句対象とし
た「くたびれた女将」でなかった
のでしょうか、ましてや佳句とさ
れる程、先輩の見逃していた諷刺

であり、内面描写の秀逸であつた
のだろうか、と。反省いたしまし
た。ともあれ路郎先生の選句に入
った句である以上、これは一步引
き下って諸説に傾聴すべき所だと
自分に言い聞かせました。路郎選
に一句も入選したことのない私が
句評を承る等、もつての外とお叱
りを覚悟しての前言旨評をお詫び
したいと存じます。

圭水——光郎さんのお話で大変
よく解りました。そこまで考えられ
ずに前言の失礼を許していただき
たい。

陽子——もう一步視野を拡げて
見たとき、光郎さん、司郎さんの
おっしゃるようになるほどとな
づける点があります。柳歴の浅い
私はもっと勉強をしなければいけ
ないと思ひました。

光郎——私も初め一読して平凡
な句だなと考へた事を白状しま
す。然し今又再読吟味しているう
ちに前述の様な想いが浮び上りま
した。成程秀句だなと思ひつた
訳です。司郎氏や陽子さん
のご意見と違つていても、見解の相
違でやむを得ませんが、私とし
ては女将になる迄の苦勞とかパト
ロンがあつて易々となれた女将とか
の経過は頭に浮かばなかったのだ
す。又一読して平凡、再読して佳
句、三読して秀句という工合に、
何回も繰り返して味読した結果の
批判ですから、これ以上申し上げ
る事はありません。

大萬川柳

雀

入選発表

選者 麻生路郎先生
投句総数五百二十一句
入選 三十二句

雀二羽都心もバタ屋だけの朝
玉島旭峯

今日も来て犬の残飯食む雀
秋方珠笑

雀に似たりBGの群が過ぎ
小平高志

刑の朝籠の雀を放ちやる
大坂薫風子

金箔の色紙に生きている雀
京都八九寸

昨日の田雀泣かせて家が建ち
神戸どんたく

雀の抵抗案山子の背にとまり
東北好郎

なつかしい雀墓参の道をあげ
大坂生薑

開拓の先きに雀が住みついた
舞屋一十

全滅の麦を雀が遠くで見
空岡忠三

一列に雀が並び風は秋
西宮牧人

一網打尽とは雀のことだった
大坂水客

雑草と雀と貧乏の子と
金敷方大

境内に住んで雀も歌になり
大坂良

岡山藤波

子雀の遭難猫に見つけられ
大坂晃

握り屋の庭とも知らず雀群れ
神戸静馬

栖鳳の描いたかたちに飛ぶ雀
大坂柳志

夕焼けへ雀も連れを見失い
大坂柳志

善意とは雀の涙ほどでよし
京都素郎

絵になれば万という値のつく雀
大坂阿茶

恩に着せられて雀の涙ほど
同

またストやなあと車庫の雀ども
同

嫁の荷の値がみしおうて村雀
見島恵二朗

一茶にはなれず雀を追っばらい
同

雀用心して一段づつ降りる
丸龜柚蘭坊

日本と同じ雀が居て楽し
鳥取弘朗

子雀が口あけてますわが家にも
岡山東岸

教室の雀の方もあわてたり
金敷方大

大坂柳志

分校の理科は雀の子も育て

(人) 雀百までしわの手に舞扇
大坂良

(地) 傷ついた雀施設の子に飼われ
大阪梅里

(天) 知らぬ間にわれ燕雀の中にあり
小平高志

大万川柳ベストテン(八月現在)

一 薫風子 一六、〇 大坂

二 梅里 一四、五 大坂

三 好郎 一三、五 大坂

四 遠二 一一、〇 倉敷

五 文蝶 一〇、五 大坂

六 圭井堂 九、〇 大坂

七 柳志 八、五 大坂

八 水客 八、〇 大坂

九 阿茶 七、五 大坂

一〇 阿茶 七、五 大坂

一 東岸 七、五 岡山

二 良々 七、〇 大坂

三 雄々 七、〇 大坂

四 珠々 七、〇 大坂

五 晃々 六、五 大坂

六 恒馬 六、〇 大坂

七 宗太郎 六、〇 大坂

八 桃里 六、〇 大坂

九 真奇 六、〇 大坂

一〇 真奇 六、〇 大坂

ベストテン上半期順位表

三月	四月	五月	六月	七月	八月
一 恒明・薫風子・梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	一 恒明・薫風子・梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	一 恒明・薫風子・梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	一 恒明・薫風子・梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	一 恒明・薫風子・梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	一 恒明・薫風子・梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶
二 好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	二 好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	二 好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	二 好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	二 好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	二 好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶
三 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	三 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	三 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	三 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	三 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	三 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶
四 文蝶・遠二・梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂	四 文蝶・遠二・梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂	四 文蝶・遠二・梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂	四 文蝶・遠二・梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂	四 文蝶・遠二・梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂	四 文蝶・遠二・梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂
五 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	五 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	五 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	五 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	五 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	五 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶
六 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	六 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	六 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	六 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	六 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	六 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶
七 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	七 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	七 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	七 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	七 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	七 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶
八 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	八 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	八 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	八 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	八 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	八 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶
九 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	九 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	九 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	九 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	九 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	九 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶
一〇 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	一〇 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	一〇 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	一〇 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	一〇 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶	一〇 梅里・好郎・柳志・水客・阿茶・圭井堂・遠二・文蝶

金泥集

「浴衣」 麻生霞乃選

キャバレーの浴衣サービス外輪なり 阿茶
無雑作に衿かき合わす江戸浴衣 同
パリ住い紺地浴衣のアロハ着て 同
三度目はゆかたで逢うて好きになり きさ子
ゆかたがけども財布持って来ず 同
ゆかた着て女らしきを取りもどし 一栄
身に合わぬ宿のゆかたで街を行き 同
音痴でも三味が合せる浴衣会 酔夢
淡いとりきんでうなる浴衣会 同
のりきいた浴衣のゴロ寝叱られる 清子
昼間からゆかた着たがる祭の子 同
お揃いの浴衣ネオンでばられて来 俊江
初浴衣亡夫と丈も同じもの 同
コマーシャルゆかたすがたも涼しそう カネ女

バカンスにそろそろゆかた持って行き 同
おそろいの浴衣で手拍子よくうい あいき
子沢山浴衣でくつろぐ間もなく 同
団体さんゆかたの柄で見わけされ 美代
初孫のおしめのゆかた回収し 同
嫁ぐ娘に母のゆかたもそえてやり みさ子
ホノルルのみやげゆかた二三反 同
浴衣着た娘の外輪たしなめる 勝子
浴衣地の暖簾をくぐる梯子酒 同
マネキンに着せられゆかた涼しそう 美喜
浴衣がけナイターに来て寒うなり 岡甫
涼み台ゆかたが甚盛かこんでい 寿美司
どき廻り浴衣よごれてはや九月霞乃

次の題「花嫁」 べ切九月末日



右

旅

旅は距離の問題ではない。目と鼻の間にも、うれしい旅、悲しい旅、忘れられない旅、忘れてしまいたい旅もあるであろう。旅友に旅についてお願いした。

(編集局)

とつとき

温泉

正 本 水 客

旅の印象のよしあしとは一体何だろうか。第一に人情、第二に旅館、第三に景観だと私は私なりに思っている。勿論人により目的によって、三要素の順序やウエイトは変ってくるだろう。隠れたる何とかと世に発表されるや忽ちにして俗化して、つぶされて了う昨今である。私のとっておきの温泉を一つだけ書いてみる。

小田原から箱根登山電車で宮ノ下に着く頃陽はもう傾きかけていた。早川溪谷の底ふかく堂々島温泉が湯煙りをあげている、旅館は二軒だけ、各々専用のケーブルを持っていて。谷の急傾斜にそって

下ってゆくと、遙かの山あいには白く、あちらにもこちらにもかかっている。ケーブルがとんと終点に止ると番頭さんが出迎えていた。降るといへぬ霧雨がハラハラと来去する。広い河原を一面の内庭にとり入れて、石だたみの小径が続いている。右手の岡の上には夢窓国師の草堂の跡がある、温泉の名もこれに起因するものだから。この辺り大きな桜の木が多く、春の美事さと思われる。小さな釣橋を渡りきると宿の灯が眼の前にあった。通された部屋は流れを見下す二階の角。あたりは暮れきった山はだに包まれて、流れの音だけが暮れ残っている。温泉は自然の岩石を組んで広々とした浴場にサラサラとあふれている。思いきり手足をのばすと山のれい気

が溶けているようで、全く浮世を離れた別天地という気がする。

二人でやっと一本のビールを空けた妻はあしたの朝は早く起きて野天風呂へいってみたいしようと眼をかがやかせた。

いつの間にか顔を出した星が、谷底のせいか異様なまでに高い。

ローマの宿で

中島生々庵

私にとつても旅に出ることは勿論愉しみである。然し私の様な街の開業医にとっては一寸した旅に出るのでも、開閉への調整やら準備が必要とあって、旅は愉しいという前に寧ろ苦しみでさえあることもある。ストレスの連続である私の生活の一コマが一日なり二日なりボツンと切れて別の世界へはうりだされたその瞬間こそは放たれた小鳥の様にたのしい。そこで目にふれ肌に感じる一本一草に対しても再び相会う日はなかなか難しい気がしてきて旅の受取り方も、風の如く来り風の如く去りとはおのずから違うものがある。北欧の空港で見た土産物店の美女の瞳に動きがとれなくなったり、エッフェル塔の横で見た月が地球の裏の日本で見える筈がないのに家郷の人達もこの空この月を見上げている様な幻想にとらわれたり、通り一べんの旅愁としてだけではすまされぬ深刻な受取り方である。

私の小さな旅の句の中の一つに

正本水客氏の「手洗いに蟹がいるのも旅のこと」がある。いかにも寂しい旅の宿である。ゆくりなくもこの句をローマの宿で思い出した。勿論ホテルのどこにも蟹の影一つあるわけではなかったが余程の私の頬に灼きつけられて居たらし、口ずさんで見たらとても寂しくなってきた。窓から見えるテルミニ駅前の広場にゆきかう人影まで何となくそらぞらしいローマの宿の夜のひとときであった。

命を拾う

橘高薫風子

昭和十九年の夏、学生だった僕は数名の友人と信州の諏訪湖畔に遊んだ。下諏訪の宿に逗留してあの辺りを徘徊探勝した。宿帳に教科書で馴染の数学者高木東大教授の名があったのを印象にのこしている。ハケ嶽が良かった。

白樺の立木を初めて見た、甚だロマンに満ちた一週間の旅も名目はヨット部の健民修練合宿ということであったのも時代を反映していた。一日、天竜峽に遊ぶ。名は忘れたが、コンクリートの近代的な橋の少し上手で泳ぎ始めた。名にし負う急流は膝が浸しない程の浅瀬でもすでに足をとられ、川底ではごろごろんと人頭大の石が流されていた。都会の人間は山国を知らぬ。山の恐ろしさ川の怖さを

を知らずにいる。そこへもってきて無茶な若者らだ。さして広くな川幅と見て、てんでに対岸へ泳ぎ出したのである。山の遭難も山国を知らぬ都会人にありがちの無茶さが原因の大半を占めているのであろうが、われわれも同断であった。二人溺れた中の一人が僕。流つ瀬に巻き込まれたが、必死にもがいたので瞬時に浮かび上ることができた。瞬時と思ったが一分近く経過していたらしい。浮かんから尚も無意識にあらがっていたのが幸運にも、奔流からは陰になっている淵の方へと流れつき、水面に突き出た岩にしがみついたまま、そのままだ人事不省。気が付くと岩の上に、磯に打上げられた海藻のように這いつくばっていた。水をしこたま飲んで頭の芯が痛むのに手足は全然動かず、「身体縮の如し」という形容はこれだなど実感した。朦朧とした眼に少し下流の流れの中の岩につくねんと腰を下ろした溺れたもう一人の、これも幸運な友人が見えて来た。僕を救い上げたのは近くに居合わせていたうら若い女性だったといえは小説めくが、事実なのである。その夜、下諏訪の眼鏡屋で新しい眼鏡を買った。僕が眼鏡が今も天竜峽の川底の何処かにある。僕はもう一度、激つ瀬も、岩のたたずまいも脳裏に焼付いていて寸分忘れてはいないあの橋の上流に立って見たい。

どぎった

チップ

福田 丁路

旅は私の気分転換法である。旅で見る山村の暮れゆく風情、生気漲る都会の夜明け、間断なく溢れる温泉の響りは、心の塵を綺麗に払い落してくる。

岩を噛む流れに添うた赤字線

丁路

私の旅は三十数年前、即ち二十才過ぎの出雲行きに始まる。まず大社に参詣して松江に引き返した、宍道湖を控えた街の総てが、豊かな情緒をたたえているのに、初旅の思い出を強く印象づけられたのである。

そしてその夕刻、静寂を求めて東郷湖畔の温泉宿の玄関に立った。一人旅の若僧を四等客と睨んだのであろう、薄汚ない眺めのきかない階下の部屋に通され、女中の応対も随分とそんざいである。しかし私はこれを氣にとめず、早速祝儀、茶代としてその程度が解らぬまま夫々三円を渡した、暫らくすると羽織、袴にあらたまった主人が、番頭とともに廊下に平伏し「今二階の部屋が空きましたから……」とか何とか云って手をとらんばかりに見晴しも良く、設備も整った二階の部屋に案内した。

あまりにもチップの効め早

過ぎる

丁路

湯に行くくと湯番が丁寧に流してくる。食事は二膳つきで、その上に名物の鰻の蒲焼が、豪勢な時絵の器に入れて添えである等……帰りは自家用人力車が待っていて、総員整列の見送りである。

さもありなん、二円五十銭の泊りに六円の心付である。今でいうなら二千五百円の泊りに、六千円の心付けを出したことになる。若僧の余りの出した振りの良さに、宿屋があてたのも無理がない。知らぬが仏で、五十銭が普通で一円も出せば大抵張るところ、飛んだ大抵振舞いをしたものである。

八月十四日三十数年前振りに出雲へ行く私を乗せた列車が東郷湖畔を通じた際、この初旅の失敗が胸に浮んで、込み上げて来る笑いを止めることが出来なかった。何はともあれ旅は楽しい。

東郷湖昔しながらに波もなし

丁路

煙り出ぬ

汽車

山田 季賛

大阪から広島へ転動した年に半年と十二年目に広島から大阪へ転動した去年の丁度今頃は別居生活で半年をすごして来た。此の間の土曜と又日曜の夜行か月曜には大阪・広島を往復の旅をする。

旅にも色々ある。唯観光で旅行するようならば又格別の楽しさがあるが、別居生活で帰省する時は大変に楽しいが、さて引き返して

て別れて来る時の淋しさは別居した者でなければ味合う事が出来まい。昔の人はあの厳しい軍隊生活で、命を的にしての別居こそ、何んとして察してよいか判らない。

月見草旅の車窓を楽しませ一人旅なんと降る降る梅雨の雨

通過駅初夏のみどりが目にしみる

車窓もう冬の季節になりつくし

何れも旅をしていて得た句である。

又席を同じくして聞入る話は面白いやら馬鹿らしいやら、

一人旅人の様々を見て戻り交通はますます便利になり本線もローカル線も、無煙化されつつある。これが子供の絵にも現われて来る。

近代化煙出ぬ汽車絵にかかれ

フィルムがたらないままで

旅がすみ

何時も旅に出る時は充分用意をしては出るのだがついつい楽しさの余り、パチリパチリがすぎてフィルム不足のままに帰宅せねばならないはめに合う。

旅で拾った

話

若本 多志

旅に出ての楽しみは数限りないがその一つに、宿の夕飯がすんで、ビールの酔も醒め切らない身体

を横たえ按摩をとり乍ら、いろいろな世間話や身の上話を聞くことは、旅の郷愁というのかをぞろろ旅情を感じさせるものである。

戦争で夫を失ない、一人の遺児を守り乍らきびしい未亡人の生活をつづけて来たという、片山津の温泉の按摩さんの身の上話を聞いて、多くの遊野郎ともがこんな眼の不自由な女性にまで誘惑の手をのばしてくるかと思ひすら覚えたものである。

数えてみれば今頃はその遺児も高校を卒え、母の慈愛に見守られて、どこかの会社の優秀な社員として勤めていることだろう。

俤を信じて茲に女生き

たしかこの句はその時に詠んだように記憶する。

然し同じ男性でも親切な、思いやりのある人もあるもので、湯の山温泉で一夜、よんで貰った若い按摩さんの話……生れて廿六年間、小さい時両親につれられて津の町へ一二度出たきり、山の中にとどこもつていて私が、去年ある大阪のお客さんの治療をしている時「死ぬ迄に一本、東京から大阪の夜景を見たい」とふと洩らした言葉に実が結んで、そのお客さんのお帰りに同行して、夜の道頓堀や千日前を見せて貰い、お宅で泊めて頂くばかりかお土産まで頂いて帰りましたが、ほんとうに大阪の方は親切な方ばかりですと、視力の残っている片方の眼に涙さえ浮べて、懐しい追憶にふける様子だった。

変った旅

堀川 蘇堂



旅三日砂の起伏もおもしろしまだ国鉄勤めの頃、見物半分の出張旅行の句この春、職が変わった関係から販売面の拡張で、急ごしらえの車内販売係が九州一周観光団体に添乗するのに、監督で乗ることになった。六月初めと云うのに不順な気候は関門通過の頃には上衣が外せぬ気温。九州は初めてのこの販売係四名、赤字覚悟ながら何とかトントンで帰りたいのが人情。「名物を食うが無筆の旅日記」的になったお客。薩摩漬、熊本朝鮮館、お次は海苔の粕漬と予約伝票片手に車から車を渡り歩く車販嬢。

有明の味をこらばす薄のコク特別注文の肥後名物はほろ酔いのお客が各車両を手伝いながら爆笑を残して次の車へ。



入門講座

研究題「客」

清水白柳

前回の本講座で類想は止むを得ないことだと書いたが、それに甘えてはいけない。類想を避ける努力はどこまでもつづけてゆくことに心掛けてほしいと思う、その心掛けの一つに表現がある。同じ生活環境を詠んだとしてもある作品には事実ばかりがあつて作者の感情がどこにあるか判らないような句になつてしまうことが多いものである。それはその作品の表現がその作者の感情を人に伝える力を持つていないからだと言えるであらう。すぐれた表現の作品は自分の生活体験を力強く正しく人に伝えてくれるものだから特に表現ということに習練してほしいと思う。類想、類型といえどもその表現方法によってそれぞれの作者の持味が出てくるのだと思つてい

るからである。

ままごとの客のすましたあ
どけなき M

ままごとの客も座布団す
められ 凡子

前の句のすましたあどけなきと
いう説明がいけない、ままごとの
お客になつてゐる児の説明にしか
なつていない。次の句は座布団に
よつてその動作迄あらわされてい
るのがよい。

内の猫気安うお客の膝に S

客の膝猫の泥足遠慮せず

勝子

気安うという語によつて表わそ
うとした苦心は判るが全体に平淡
な感じがある。その点猫の泥足は
ポイントがはっきりしている。句
論泥だらけでなくても泥足という

語によつて申訳けしている主人側
の表情もうかがえるのである。

千客万来麦茶だけになり S

千客万来お客がみんな金に
見え S

何故麦茶だけになつたのか判ら
なかつたし、お客が金に見えると
いう表わしかたもまずいと思う。
古句に「千客万来みな来ると困る
なり」という名句がある。

大事な客は応接間へ取残
し Y

この客はお茶だけで済む応
接間 東天紅

前の句はも一つはつきりつかめて
いない。取残しも措辞が悪いと思
う。句意を生かして「気の置けぬ
客応接へ残される」とでもすると
どうだろうか。お茶だけで済むの
句は焦点がつかめていて面白いと
思った。

まな板が慌てる日暮れ不意
の客 I

不意の客へ押売りもあわて

一編

前の句はうまく表現されている
が底が浅い句だといえる。句にあ
らわされていることだけに終つて
いるのである。次の句の押売りは
面白と思つた。そこには微笑笑
があるのである。

常連に店を頼んで出前に出

宗義

常連を符牒で分けてゐる屋

台 八九寸

二句共しつかりした詠み方でそ
つのない句である。殊に出前の句
は佳いと思う。

のこのこと上つてどうだと

言える客 弘朗

客並みに扱い友達甲斐がな
し 保夫

着想と表現がよくマッチしてい
ると思つた軽い内容の句だから軽
るく表現されているのである。

何か何処かが欠けてる深夜
の客 八郎

諷刺の利いた句であつて作者の
苦心がうかがえてうれしい句であ
る。

洪水のようにさわがせ引揚
る 秀子

なかなか立派な作品と言える。
情景もはつきりと洪水のようにと
表現されているのがよいと思つ
た。

先客があつて無心を言い出
せず 万竿

この句もよい。先客は落つき払
つていたのであらう、いい着想で
ある。

飲む客と飲めない客で気が
疲れ 兎康

句境はやや平淡だが表現にツツ
のないのがよいと思つた。

客寄せの品洗濯に耐え切れず

母始

鋭い着眼である。表現の方法に
大変苦心して居られるのが成功し
ている句である。

美術商売らぬ虎の子客に見
せ みき子

着感で生きている句である。売
らぬ虎の子とまで言わなくとも、
売らぬ品まで、でもよくわかるの
ではないかと思つた。

五六人乗せ赤字の線の汽車 K

国鉄の赤字線のことをテレビか
新聞で見たがこの句には作者の感
情が出ていないと思う。

来客へお茶漬の音小さくし 李鳥

この句にはそこはかとなき生活
の感情がある、それをよく訴えて
いると思う。

履物でお客様のすじがほほわ
かり 句葉坊

面白い観点であるが、まだ少し
理屈っぽい感じのするのが惜しい
と思つた。

じれったさ客がそろばんは
じき出し 城東

佳句である。上五のじれったさ
がよく表現されていて生きてい

る。

里帰り母にあまえに来たお客
客 杏色

明るさと暗さ交互にきけて
来る 秀子

前の句は平淡な点が惜しいと思
うが、次の句はすうどいものを持
っている。表現にも味のある言葉
を使っているので立派な作品にな
っていると思う。

引きとめて客は世帯のあれ
に辞す 隆史

いい句だと思ったが、引きと
めて客はではなく、引きとめた客
でもないかと思ったがどうだろ
うか、句意は変らないと思うのだ
が。

招かざる客保険屋の恩師来
る 酔夢

招かざる客へ一〇番遅す
ざる Y

招かざる客というのは後の句の
ような場合に使う言葉だと思っ
て前の句場合は「困ったお客」と
でもする方がよいのではないか
「困ったお客保険屋の恩師来る」
である。

言いたげに言わず帰った客
の背 生薑

少し物足りない感じのする句で
ある。それはあまりにもスラスラ
と出来ているので句意は深いもの

を持っているにも拘らず深味を感
じさせない点にあるのではないか
と思う。

客足がたえてで欠伸店を閉
め 雄水

真正面から取組んでいるので損
をしている句である。その通りな
んだがそれだけでは共感を得るこ
とが出来ない。

吉日を決めてお客の数をよ
み 晃康

結婚式の準備に忙しい親の気持
が詠まれていたのしい句であ
る。表現も難のない出来であ
る。

靴磨いて又ひとしきり女客
和三郎

法衣着た像に裸の女客
句楽坊

投げ座り妻の気の合う女客
生薑

昆布茶出す奥へ通した女客
井平

女客の句にはそれぞれの面白さ
があつてよいと思う。法衣の句の
裸の女客は裸にひとしい服装のこ
とを表わしているのだからよい
だろう。

靴磨き女あぐらに客たかり
繁太郎

下の文字の客たかりは句品を傷
つけると思うので「客を待つ」と

してはどうだろうか、「靴磨き
の女あぐらで客を待つ」となるの
だが。

客人は朝の寝床をそつと立
ち 寿美司

この句は自分がそうした経験が
あるのでそれ客人が立つという表
現にしてあるのだと思うがこうし
たあらわし方はだんだんなくな
ってゆくだろう。

扇風機買わぬ客へも首を振
り 李鳥

こんな境地で満足してはいけ
ない。もっと深くものを見つ
めることに心掛けてほしいと思
う。

アルバムが出て来客長くな
り 弘朗

この句にも前の句と同じことが
言えるのではないか。

百貨店万引きしても客のう
ち M

客のような顔してトイレだ
けで去に 井平

前の句はその通りのことだが、
それだけでは句としての味がな
い。後の句にはどこかとほけた
ような可笑味があつてよいと思
う。

来客へ棚押入で寝てる品
辰始

着想で生きている句であるが表

現にぎこちない点があるのが惜し
い。句意は不意の来客で押入から
客布団を出したりして平常は使っ
ていないもののことを寝る品と
いったのだがもう少し練ってほし
かったと思った。

求めない客玄関ですぐ帰
り 三五島

求めない客がはつきりしない、品
物を買わない客だとすると玄関で
は変であり店先でなければならな
いし、来てはくしくない客だとす
るとすぐ帰りがむじゅんしている
ように思う。「玄関で食い止めて
置くいやな客」では作意と違
うだろうか。

来客て夫婦喧嘩は立ち消え
る Y

客が来て夫婦喧嘩はたなに
上げ S

ありふれた着想で平凡さを免れ
ない。こ

うした境
地の句は
あまりに
も多く詠
まれてい
るので取
捨に困
るのであ
る。

悪態
のヤジ
を聞ん

和館 大華文

日本建築の特色に
近代美をいかした
建物で絵画・彫刻・漆工・重宝やくすはす
書蹟・陶磁など国宝をふくむ美術館です
要文化財を集めたすばらしい特別展覧
逸品には秋には特別展覧も開催
（月曜休館）
近鉄学園前駅下車すぐ

増三郎 文庫

てガムを噛み

H

ガムを噛みながらヤジを取
巻いているのだが、そこには
何があるのだろうか。この句から
はそれ以上のものを感じること
が出来ないのが惜しい。

客が帰れば良妻を脱ぐ
和三郎

何かピンとくるものがあるのだ
が、それが何であるのか説明が出
来ないもどかしさがある。良妻を
脱ぐというのは良妻らしい顔で応
待していたのだが客が帰ったた
で、その良妻らしい仮面をぬいだ
ということになるのだが良妻も脱
ぐとなると現実にはやれやれと平
常に着かえることになる。良妻を
に作意を感じて敬意を表する次第
である。

次回研究題「音」五句以内
発表 九月二十日
発表 十一月号の予定
宛先 大阪府南河内郡美原町丹
上四〇四 清水白柳宛

一路集



マイナス

中島生々庵選

どぶ川へすてる思いの妻を切る 桂 仙
 マイナスも親の光りて役がつき 照 子
 マイナスになる百姓にふりむかず 周 甫
 一言でマイナスにしてしま すみれ
 マイナスの自慢ばなしに里が知れ 寿美司
 反感を持ちそうなので叱言やめ 涼 人
 マイナスをなんとかしよう 手形書く 孝 風
 マイナスを支える手腕妻は持ち 辰 始
 マイナスになつて損した一夜づけ 保 夫
 どぶ池は引き算だけで日がく 春 巳
 マイナスの家計笑顔で嫁御受け 繁太郎
 わが半生マイナス続きで黄昏れる 凡 子
 マイナスになるとは知らぬ厚化粧 晃 男
 差病んで家計のマイナス統 歌 子
 マイナスも互いにいたる仲の良さ 弥 生
 マイナスになつてソロボ 声を出し 可 住

マイナスになるとは知らぬ無礼講 木 魚
 マイナスで釣る気原価を切るタオ 液 月
 忠告がマイナスにした二人仲 隆 文
 マイナスの帳簿へ税吏のうす笑い 無 極
 肩書きがマイナスになる頼みごと 和 三郎
 マイナスの極秘を妾が嗅ぎつける 萩 路
 マイナスになる話には茶もくまず 藤 波
 ご破算をしてマイナスを確かめる 勝 子
 問いもしぬ事まで答案マイナスに 八 郎
 老母の声マイナスであらうがあるまい 雄 々
 マイナスも継げば鳴りだす子の科学 野 迷路
 マイナスを覚悟の上に咲いた恋 李 鳥
 マイナスの競馬の帰り雨にぬれ 代 仕男
 マイナスになった首脳の車中談 秀 峰
 マイナスになつたサーピス過剰辯 隆 史
 口下手がマイナスでたと 如才なく 隆 史
 会計士青を赤に組み替える 隆 史
 マイナスをよそに労働旗を振り 隆 史
 マイナスになります 女将耳を吹き 隆 史
 出世街道マイナスにした汚職 隆 史
 マイナスに聞いても話うます 隆 史
 マイナスと見たかこの頃寄りつかず 雄 声
 じり貧をあせつて泡沼深くなり 光 郎
 マイナスのくちびる寒し我を通す 秀 子
 精力のマイナスへ補給する注射 句 楽坊
 上役へのマイナスになる正義感 鶴 汀
 ノーマネーマイナスプラスヒュマニチー 専 翁
 プラスマイナスゼロで出張から帰り 光 道
 マイナスになつてまた浅い知恵 雪 美
 マイナスを追つかけては通信簿 祥 月
 釣書へマイナスらしい事も書き 宗 義
 底抜けのあかるさマイナス吹きとばし 愛 鳩
 マイナスになる口軽へ剣を打ち 柚 蘭坊
 マイナスになつても云わねや気がすまず むしな

マイナスを数字の魔術がプラスにし 三五島
 マイナスへ埋めるボーナス使い込み 旭 峯
 親の助言子の成績にマイナスにし ふ じ
 平凡な日日プラスマイナス繰り返す 石 峰
 マイナスの恋はばかりの相談欄 王 石
 時価に見積ればマイナスでない白書 八 九寸
 マイナスの顔で家出の子が戻り 千 翁
 人生にマイナスがあつて夢もあり 光 子
 反応はマイナスと聞き胸をなで 万 竿
 マイナスは承知男としての意地 古 心
 マイナスのイオンに雷負けて落ち 生 薑
 少年犯罪社会のマイナス面曝らけ 同 明
 プラスだマイナスだ中学生うれし 同 明
 スキャンダルマイナスどころか名が上り 同 明
 立て板に水が却つて票減らす 圭 井堂
 機転きき過ぎて夫人に疑われ 同 明
 マイナスをライバル再三念を押し 九 呂平
 事ごとにマイナスをそれからおじ 同 明
 中央のマイナス地方で埋めあわせ 宗 太郎
 マイナスを叱れば私立へ行くと言ふ 同 明
 プラスする為のマイナス気に入られ 惠 二郎
 名仲裁プラスマイナスゼロにする 同 明
 マイナスは会長寄付でけりをつけ 十九平
 ライバルのマイナス嬉しい ニュースとす 同 明
 秀
 マイナスへ自腹を切つて疑われ 宗 太郎
 マイナスを怖れ多弁の妻連れず 十九平
 マイナスが喋りプラスが黙つたり 千 翁
 何一つとれず裁判に勝つただけ 静 水
 マイナスの徳が輝やく藍綬章 八 九寸

雲

野村味平選

商談も雲行一つで風呼び 照 子
 はれ間から片割れ月がなつかしい 周 甫
 雲間からのぞく月夜も久しぶり すみれ
 台風之余波らし雲の走ること 同 明
 雲たれて旅の夜空を不安がり 玉 造
 雲つかむような話でおもしろし 同 明
 名月にする一筋の雲が冴え 九 呂平
 雲一つ無い海ヨット快走す 隆 史
 東大寺屋根の上から雲が出る 春 巳
 爆音を雲に残して機は見えず 晃 男
 いわし雲父は漁師で終りそう 静 波
 雲行きを見ては二の足踏み思案 繁 太郎
 雲うつす池に非番の糸をたれ 静 水
 車窓から見る雲の位置又変り 光 郎
 ハイキング入道雲が驚ろかせ 雲 美
 ちぎれ雲ホームシックになつて 祥 月
 入道雲写してウキは動かない 光 道
 あかね雲破つて黒富士首を出し 秀 峰
 荒れそうな雲行き会長座をはずし 秀 峰
 レーダーで台風の雲追いまわし 句 楽坊
 山の雲下山するのを早めさせ 鶴 汀
 雲一つない秋晴れを空の旅 圭 井堂
 ちぎれ雲故郷の方へ飛んで行き 涼 人
 雲流るわが運命に似て流る 孝 風
 飛行雲日本晴れを反射に 辰 始
 雲の峰見上げてバイト汗をふき 保 夫
 娘の嫁ぐ夕べの空にあかね雲 専 翁
 故里へ流れる雲にノスタルジャ 楠 雄
 嘘の世の空悠々と雲ながれ 痴 亭
 雲脚が垂れてる一雨来るらしい ひ 呂し
 入道雲海水浴をおびやかす 勝 子
 風鈴を呼ぶ雷雲が近うなり 千 翁
 蒸し暑さ残して夕立雲は逃げ 雄 々
 雲行きを見飽いた頃に定年期 迷 路

着飾って出て雨雲に気をつかい 李島
 作柄に不安がつる雲が垂れ 代仕男
 水すまし入道雲をかき乱し 宗太郎
 長雨の雲根めしや今日も又 雄声
 水の面に雲を映して秋静か 孝正
 雲行きを見て女房は酒を出し 桂仙
 雲行きがあやし話題の尚変えず 甞光
 雲の線出して雲柳括けて見る 初甫
 頂上に立てば下から雲の湧き ろ亭
 寝ころんで見るに惜しい青い雲 弥生
 郷里の母がこいしい赤い雲 木魚
 雲低く明日の漁を妻案じ 淀月
 雲の上初めて飛んで来た伊丹 同
 雲一つ湧かずに今日も照り続け 隆文
 雲行きを見ておねだりを上手にし 同
 千物の乾き切ってるちぎれ雲 無極
 雲の影乱して金魚恋をする 和三郎
 故郷からの返事が遅い 同
 慈母に似た雲をみつめる 同
 長雨に雲の切れ目を拝んでき 映輝
 あいさつが雲の上から聞えて来 同
 雲行は怪しフラン二本立て 同
 雲行きを眺めて雨具子に持たせ 同
 生活のつかれ寝ころび雲を見る 愛鳩
 草とりの江が目にしむ雲の峰 むじな
 入道雲水平線に胡座かき 惠二朗
 夕立が忘れて去った雲一つ 石峰
 やりばなき鬱憤雲に救われる 同
 寄り添うて雲を見ていた初ライト 同
 入道雲本格的な夏を知り 杏花
 あの雲に話しかけたい スナナ日 王石
 台風予報まだ悠々としてる雲 同
 積乱雲思い切れよと言う 如く 光子
 夕焼の頬まで染めた赤い雲 三五島

洗濯機廻して雲の行方見る ふじ
 煙突が動いて見える流れ雲 宗義
 伏兵の様に夏の雲が湧き 同
 雲の峰友の事故死にふれる朝 旭峰
 鯛雲不漁に馴れし漁夫の顔 生薑
 雲つかむような噂もはつとけず 同
 雲早やし近づく台風にある不安 古心
 一日を雲の流れと浮木見詰め 同
 雲足の早さへ遍路も歩を早め 十九平
 曇った陸に上って呑むかまえ 隆子
 黒部ダム雲はゆう／＼影うつす 同

佳

青春に雲あり今日も雲を追う 同甫
 流れ雲捨てた故郷に眼がうるむ 九呂平
 雲行きを気づかいながら旅に出る 歌子
 流れ雲眺めてのんびり温泉に浸り 光郎
 恋知ってから美しい雲に見え 雄々
 雲つかむ様な話で借りに来る 野迷路
 キャンデ売り雲の切れえ声をはり 宗太郎
 鉢巻が袖に白いいわし雲 八九寸
 大阪へ入道雲がのしかかり 可住
 いなすまを孕んで夕立雲不気味 十九平

人

子の写生日本晴れへ雲をかき 萩路
 流れ雲淡い暮情を乗せてゆく 惠二朗
 天
 画布へ今昨日の雲が見当らず 旭峰

根 氣

直原七面山選

職変えて変えて根氣のない男 古心

ぐうたらな夫へ根氣のキを捲き 九呂平
 ストにだけ見せる根氣を惜まれる 静波
 脳味噌の不足根氣でカバーする 静波
 根氣よい男浪人まだつづけ 同
 七十の眼には根氣のいるテレビ 同
 大公望が互に意地を張る根氣 同
 根負けをするなど闘病はげまされ 同
 根氣よく今日も女をくどいてい 同
 根氣よく手伝う子供にあってあり 同
 手内職ただ根をつめ根をつめ 同
 セールスマンの根氣に負けた洗濯機 同
 米年も東大ねらう根のよき 同
 虫を待つ蜘蛛の根氣に教えられ 同
 賭け事の外には根氣のない男 同
 根氣ない子の宿題へ菓子ジュース 同
 麻雀を囲めば根氣勝手に出 同
 変人の根氣 国宝など作り 同
 女房に釣りの根氣をくさされる 同
 鉅直がじわりじわりと根でのし 同
 保険屋の根氣に負けた契約書 同
 根氣良さを買われ涉外課へ廻る 同
 根氣よう貢いだ女に逃げ出され 同
 断つて／＼保険外交今日も来る 同
 店先きで駄々こねる子へ根負けし 同
 出来栄より根氣の良さを買うてくれ 同
 信じあう二人が晴れの日待つ根氣 同
 芸で身を立てる根氣の舞扇 同
 借るまでは去なぬ覚悟の巻煙草 同
 この上の根氣は慾も手伝うて 同
 歩一打つ勝負にもいる根氣 同
 セールスの根氣に負けた判を押し 同
 中卒の根氣判屋の職をつぎ 同
 運針の根氣にアブレ焦れてくる 同

根氣もうなく本当に齡をとり 旭峰
 才能と別に根氣のよさを褒め 十九平
 根氣ない男と知った安定所 王石
 好きな道他人は根がいいと言う 惠二朗
 竿垂れてウキの動きを待つ根氣 隆史
 仲人の根氣へ娘にえきらず 静水
 パチンコへは終日おぼる根氣持ち 光道
 ほんぼんで育ち根氣のない男 同
 日盛りの蟻の根氣にむち打たれ 同
 あなどった子の宿題に根がつき 同
 浪人六年まだ東大をあきらめず 同
 仲人の根氣に折れようかと思ひ 同
 根氣よう寝ていなれと達者言ひ 同

佳

クラブ振る根氣が欲しい若社長 泉太郎
 根氣よく選って初めの柄に決め 李島
 ちと根氣あれば才智惜まれる 八九寸
 半日の根氣へ雑魚が二三尾 愛鳩
 お百度の根氣を神様きこしめし 同
 陳情の根氣に負けて組む予算 同
 親方が蟻の根氣を例に引き 同
 貧農の根氣田も買い倉も建て 同
 有刺線を張って値上り待つ根氣 同
 迷いぬく女の客に いる根氣 同

人

根氣よい方ねと女振りつづけ 十九平
 地
 小魚の小骨をとっている根氣 鶴江
 天
 魚の巣の切られても張り切られても張り 雄声
 軸
 根負けをしたのか女帯を解き 同
 愚直さの中にひそんでいる根氣 同

柳界展望

句会

▼本社九月川柳忌句会は十日(火)午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。二十三日の川柳忌を繰り上げての開催ゆえ、柳縁につながる作家お誘いの上二人でも多数のご出席をお願いする。

▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)納涼句会は八月二十五日(日)午後五時から島之内「文金」で開催された。▼南海電鉄句会(大阪市)は八月十五日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼大阪通信病院川柳会八月句会は三十一日(土)午後一時から

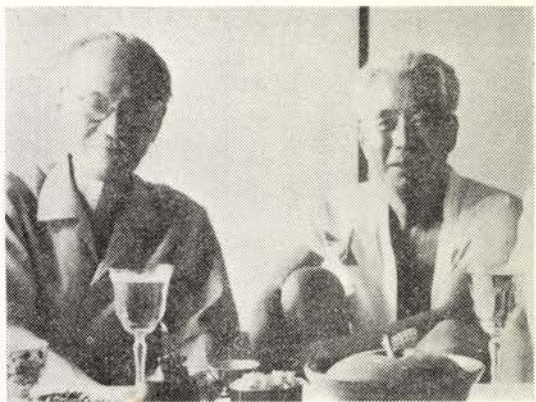
北館五階会議室で開催。▼コッコ川柳会句会(大阪市)は八月三十日(金)午後五時半からコッコ株式会社会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼川柳俳句支部(岡山県)七月例会は川柳まつり優勝祝賀句会として二十日森本正州居で開催。▼川柳岡山支部七月例会は二十日山陽旅館で開催。▼川柳篠山支部(兵庫県)八月句会は十一日(日)午後一時から遠山可住居で開催。▼広島平和祭川柳大会は八月四日(日)午前十時から平和記念館で開催。出席者七十余名の盛会であった。▼明和研究会・甲

南川柳教室合同太山寺バス吟行は七月二十一日午前十時から開催。▼水郷川柳社(大洲市)主催の夏の川柳大会は八月四日長野文庫、渡辺睦童氏らの参加で盛大に開催された。▼第八回長崎県下納涼川柳大会は八月二日夕長崎市伊勢町伊勢神宮で開催、百余名の参加者で極めて盛会であった。▼古川柳研究会(東京都)は八月十日十一日の両日、熱海双柿舎で二十余人の集りを持った。▼井上吉次郎文学博士(不朽洞賛助会員)の喜寿記念出版刊行会が大阪市大淀区本庄川崎町三ノ五大阪高速印刷株式会社内に設立。十一月刊行予定の「記者と学者の間」の賛助金一口千円也を募集中。▼金子香風(上田市)句碑建立基金募集規定は一口金三百円(一人何口も可)、申込所は上田市坂井田町閑静流芳、川柳六文銭上田吟社宛。第一回切は十一月末日。▼第十二回東北川柳大会(仙台市)は十月六日(日)午前十時から仙台市東二番丁河北新報社別館ホールで開催。兼題はよろめき・やんわり・しんがり・めぐり逢い・バナナ・霧・秋刀魚・細い・微笑・各題二句、投句は百円封入の上九月末日までに仙台市東八番丁一七〇後藤関人方東北川柳大会係宛。

▼路郎主幹は八月二日(金)岩崎愛二氏を京都府長岡の梅ヶ丘の新居を訪問。翌三日は愛二氏創案、

毎日放送主催(世話杉道助氏)等の財界名人界に出席された。▼橋本緑雨氏(大阪市)は七月二十八日舞鶴港を見学、翌日敦賀、琵琶湖北廻り、大津から名神高速道路を経て帰阪、二日後に自宅で仆れ、右手足の自由が効かず食事も食べさせて貰う日が続いたが、ぜん時回復に向っていられる由速かなご快癒をお祈りする。▼相元紋太氏(西宮市)は八月七日路郎主幹宛、「最近先ず無事と申せますのでこの調子でと頑張っております。然し動脈硬化の身体障害で不自由なもの、結局病生活の毎日、医者の手が切れません。これが齢かと従うております。」と寄信された。▼阿部佐保蘭氏(東京都)は八月九日問屋の招待で日光・奥日光を週遊された。「神主も

米沢睦明氏(大洲市)は八月六日



梅ヶ丘の一日

岩崎愛二夫人のキヨシさんが一月に亡くなられた際、シヨツクが大きかったので告別式には豊乃女史を代理にさし向けられたが、それでは心がおさまらず八月二日の午後京都府下の長岡町梅ヶ丘の岩崎邸を訪ね、盛にぬかずかれたのであつた。

写真説明一愛二氏(右)路郎主幹。

一著名作家の川柳句集一



定価300円
送料50円

★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山の産。多年不朽洞会員として又岡鉄川柳人として古豪の名をほしいままにしている。三十余年の柳歴を飾る数千句中より百句を自選し、各句に感想を附して世に問うもの。

★出版予定日。十月初旬

★六〇〇部限定版につき御申込は早く。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

大阪市住吉局区内万代西5丁目25
発行所 川柳雑誌社
電話大阪681振替口座大阪75050

浜田久米雄著 麻生路郎序

行楽の秋

趣味の集りに、吟行に、御宴会に、御家族連れのお清遊に御越し下さい。

もみじの名所

竜田大橋下車

電話竜田一六二

料理は一流値は三流
酌は有芸仲居揃い

竹青の店

不朽の人々



大聖寺の野村進氏（信用組合の役員）

あんたはシと添うて見たいと思たけど
(味 平)

落語の高座に上がったような容姿、味平に芸ことをやらしたところまで下で、唄わしても、ネブカ節で上手と言われるものが何一つない。先月の下旬のこと勤め先の連中と近くの温泉で一泊、横にいたポンチ上りの職員が座布団を抱かせて何か芸ことをやれというらしいので、この子捨てざればの詩吟のくさきかとも思ったのに、わたしのラバさん南洋ちゃ美人と身ぶりもお可笑くやっていたので、そんなつやばさのあるからだのこなしがどこから出るのやとあきられたりはめられたり。

バスで竜洞・桂浜などを周遊、八日にははるばると足摺岬へ。バスの中から画信を寄こされ、句も「台風よこされ足摺デンと座す」▼渡辺曉童氏（愛媛県）は郡内校長会の研修旅行で高野山・奈良・京都へ。帰路は名神高速道路をブッ飛ばし暑かったり冷やったりした。旅の後、新居浜・松山へ出張、八月四日には大洲市の川柳大会に参加、掠影・曉明・曉風の諸氏と久しぶりに交歓された。▼村田岡魚氏（東京都）から路郎主幹に暑中のお見舞を戴いた。「暑夏時老いの命へこんにちわ」▼奥谷弘朗氏（鳥取県）は七月二十日役所のレクリエーションで隠岐の島に渡られたが、本当にきて良かったと思う程風光がすばらしかった。由。「あこが飛び遊覧船舟を喜ばし」▼住吉貞康氏（会津若松市）

は最近いよいよ作句のむずかしさに閉口、白柳先生からの励ましもありますものの、当分作事よりも読む事に専念したいと思っています。▼池田可宵氏（長崎県）は八月八日刑務所教育に川柳で動議十年、法務大臣賞を授賞された。▼石曾根民郎氏（松本市）は九月一日東奥日報社主催の青森県下川柳大会に招待される。▼堀田竹林氏（静岡市）は七月静岡高校の同窓会で色紙を揮毫。「月に花に愛すべきかなわがいのち」▼若林草右氏（西宮市）から本社発送部へ。「川柳雑誌八月号拝受。宛名に地図まで入れた間道さ。いかな郵便屋さんも判らなかつたと持帰るわけには行かんでしょう。深謝。」「十年も住んで郵便地図がいり」▼福田丁路氏（高槻市）は八月四日穴道湖が見たくなり松江

へ。帰りに足を伸ばして出雲大社に参詣の予定と。「バカンスの群れに穴道湖取りまかれ」▼河合卯翁氏（金沢市）は八月十四日午後、本社を訪い、路郎主幹としばらく談話されて帰された。▼川岡霊眼子氏（諫早市）は別項掲載の県下納涼川柳大会の席上、時代句兼題「琵琶法師」の特選に入賞、社殿に木板額に掲げられる事になった。句は「すずき原月に法師の琵琶は冴え」尚、当日池田可宵氏とゆつくり談話された。▼辻川喜仙氏（大阪市）は四年前に失明したが大阪市大附風病院で白内障の手術を受け、目は強度の眼鏡を掛けると思えるまでに回復された。しかし夜の句会への出席はほど遠いらしい。▼橋高薫風子（大阪市）は八月二日から夫婦と子供達だけの二泊のパカンスを白台ヶ原へドライブ登山をし、川柳とは又別な一日を愉快に過ごされ

た。「ドライブで来ても頂上は山の味」▼杉本一鶴氏（貝塚市）は療養中の病状やや好転して日々心楽し過しておられる。▼本多柳志氏（大阪市）は七月二十日家族旅行を高野山の涼域にして、都会

すばらしい
着心地
蝶矢
シャツ



の極暑を避け山内に専ら川柳を求められた。「仏法僧待てば涼しい十七度」▼内藤きさ子さん（岸和田市）から、「段乃先生お褒りございませんか。川柳まつりのオデモヤンは涼風のような軽い踊りでした。私は目下グループの方が休んでいますので一緒に休んでいます。踊りも仲々身体が丈夫でないと駄目と、先生の若さを羨ましく思います」と。
(薫)

正誤

▼前号四三頁二段目、二十九行目の句主、殊笑とあるは花槽の誤りに付訂正▼同上段三十四行目の句主失名とあるは和三郎に付き訂正。▼同二十頁上段、後から二行目の句、「夜学生」の二句は前々号と重複に付取消すことにした。

いのちある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 八月旬会 (大阪市)

8月7日 午後6時

会場—— 千日前自安寺

自安寺は落ちついた静かな会場である。天井に近い四方から扇風機が回転する。ここ大阪一の繁華街を、よそに、句箋に走らす鉛筆の運び、川柳人ならではの楽しい集りである。本日の柳話は、松江梅里氏、初心時代のこと、川柳が金儲けに役立ったこと等々をユウモアたっぷりに話された。兼席額いずれも今の世相を直視した出題であった。「バックホーン」を選ぜられた路師師は作句する前に課題をよく検討すること、それには辞書に親しむことだと説かれてから披露された。本席の不朽洞杯は、古豪、長谷川三司氏の頭上に輝いた。散会時に午後九時

出席者——路郎、水客、黙平、八郎、舟遊、井平、水京、恒明、文秋、保美、一舟、専翁、摩太郎、梅里、天樹、好郎、野迷路、柳志、浩、滋雀、弥生、判志、庸佑、圭井堂、進之助、静馬、白

柳、与呂志、栗、一栄、清子、生々庵、句楽坊、秀子、旅風、メ女、すゝむ、柳宏子、明子、三司、一六、薫風子、阿茶、宏子、霞乃

兼題「バックホーン」麻生路郎選

舞扇気品をバックホーンにして 生薑
強腰のわけが解って笑うとき 宗義
バックホーンお歳のせいで息が切れ 生々庵
バックホーン 船場で丁稚から仕上げ 井平
バックホーン マイナス面が多すぎる 恒明
バックホーン 意志は無視していろいろ 与呂志
学究の兄と違つて骨があり 圭井堂
バックホーン 家では弱き夫の座 高志
バックホーン 多少偏屈とも見られ 阿茶
バックホーン 和を心得てゆるぎなく 文秋
筋金のはいつた腕を拝まされ 黙平
バックホーン カチンと音のせぬ堅さ 旅風
「根性」が社是を貫くバックホーン 柳宏子
バックホーン 形勢不利へあわてない 宗義
バックホーン 通ず辞表を叩きつけ どんたく
バックホーン 馬鹿になるとこ心得る 恒明
兼額「渠」 中島生々庵選
伝書場の縁に夫は渠へ帰り どんたく
いつの日かは我が渠と思う墓来り 生薑
二号置き愛の渠などとおこがまし すみれ
燕の渠今年には空家のままになり 恒明
愛の渠が失業保険金でいきをつき 判志
元の渠へもどり雇われマダムです 栗
愛の渠というアパートのこかし すすむ

愛の渠をちよつとついで友は去り 梅里
愛の渠というにはわびし二階借 柳宏子
大屋根へ返しに登る雀の渠 旅風
渠というた方がビツたりする我家 一舟
千円と知らず鼠は渠へ運び 柳志
渠をついて犯人はもぬけのからと知れ 野迷路
愛の渠の手料理まずいものがなし 文秋
渠をつつく吾子蜂の目を感じてす 与呂志
雀の渠慈悲 賜らぬ法隆寺 静馬
渠が安泰なれば鳥さえよく歌う 梅里
蜂の渠をつついて総会屋は帰り 高志
渠に口を並べて順をせきたてる 天樹
幽霊が奈落で蜘蛛の渠にかかり 梅里
目と鼻のさきに渠ありて若旦那 八郎
僕の渠ですと顔が利くつもり 水客
秘書つれて古渠はなれぬ母を訪い 阿茶
左り前になつても燕渠をかえず 梅里
密蜂の渠を出てまっす当てがかり 水客
くもの渠のくもに暮らしを見下され 三司
愛の渠がおむつ干し場と世帯じみ 生々庵

兼題「サングラス」西尾栗選

サングラス外して愛を確かめる 宗義
サングラス非常警戒にひつかり 一栄
サングラスかけて世間を狭く生き 静馬
サングラスと見せて悲しい色眼鏡 生々庵
中国の要人とかでサングラス 清子
サングラスかけりや私も女王蜂 明子
サングラス外す話になつてくる 水客
サングラス掛けて恩師とそれちがい 静波

女房が先ず反対のサングラス 高志
サングラス四角い顔がギョウめき 水京
サングラスどすのきいた声を出し 庸佑
サングラスかけて貧相な人となり 柳宏子
ネオンが笑うてる道頓堀のサングラス 生々庵
サングラス沢市あんといひやかされ 滋雀
度胸とは別サングラス吃りかけ 天樹
サングラスここらは恐いとこらしい 弥生
泳ぐ気のないのが三人サングラス 失名
四流国黒いめがねが大統領 野迷路
サングラスかけてスターにあるレジャー 文秋
チップまで置く客だつたサングラス 好郎
サングラス人目を忍ぶだけでなし 黙平
遠出する芸者が掛けるサングラス 三司
サングラスのままでほんん長つて来 柳志
ワシヤワシヤとサングラスはずすなり 恒明
男の目意識しているサングラス 好郎
サングラスとれば柔和な顔をして すすむ
モンタージュ横目で見るサングラス 進之助
サングラスブレイボーイのつもりなり 水客
サングラス美容整形中という 阿茶
サングラス掛けて避暑地の顔となり 天樹
サングラス隣の席がそつと立ち 舟遊
阿茶

兼題「ビール」金井文秋選

グイグイとビール仇のまじに呑み 栗
お手前のようにジョッキを持つおんな 静馬
あせる気をビールの泡にのめられ 天樹
子にジョッキはビールの月給日 弥生

頂上へ今一息の缶ビール 好 柳 郎
 B G 三年ビールの味がわかりかけ 静 馬
 男女同権はつきり見せるビヤホール 一 舟
 見学のビール会社でようのまず 白 柳
 スキャンダルビールの泡の中に浮き 進之助
 おとしや赤毛に染めて大ジョッキ 野 送 路
 二級酒でかなり酔わして抜くビール 好 柳 郎
 ビヤホールで下地を入れてでてて 梅 里
 御えんりよもビールの泡の消えぬうち 句 楽 坊
 頼杖を女もしてる大ジョッキ 保 美
 地下足袋へビールの泡もこぼすまい 梅 里
 缶ビール山彦さんと酌みかわし 生々庵
 おんな職あつてビールを飲むおぼえ 文 秋

席題「飛火」 川村好郎選

すねにきず持つて飛火へ落ちうかず 柳 志
 大物に飛火か刑事声変り 一 舟
 不渡りが小商人まで飛火して 井 平
 御用さきの口から寓居が知れて来る 舟 遊
 改選の飛火守衛にまで及び 保 美
 子を叱る飛火みんな妻が受け 静 馬
 汚職記事飛火の方が派手になり 柳 志
 火叩きで消せるつもりでいた飛火 圭井堂
 飛火するところにかえガッソ 屋 梅 里
 飛火には心配もなくビルが建ち 文 秋
 大臣に米で消えていた飛火 舟 遊
 スキャンダル口の軽さに飛火する 白 柳
 飛火から弁護士に知意を借り 摩天郎
 火災保険先月で切れていた飛火 恒 明
 子をかばう妻も序に叱られる 静 馬

圏外に立てば飛火も面白し 柳 志
 大物に飛火してから直ぐに消え 水 客
 不渡りの飛火へ銀行冷たすぎ 好 柳 郎

席題「寓居」 正本水客選

表札に寓居と書いて見栄が 生々庵
 宛先は本宅か寓居かと聞きかえし 判 志
 六甲の山裏にして寓とあり 薫 風 子
 全盛期しのばす寓居のすばらしき 庸 佑
 ガレージをつけて甲斐性のある寓居 進之助
 寓居から浴衣のままで捕えられ 好 柳 郎
 何々寓と書いて二号と間違われ 清 子
 ひっそりと寓居つきあいにくいこと 柳 宏 子
 誰かが住む寓居が今日は声がする 天 樹
 夏期講習だけで集って来る寓居 句 楽 坊
 寓居からの使命社長の誠が飛び 保 美
 窓の灯のおそく返つく寓居にて 白 柳
 寓居にも陣笠どもはうようよし 恒 明
 孫に囲まれ寓居わきかえり 庸 佑
 判もらいにまわる寓居は暮れてから 水 客
 馬子唄を検舞台で聞くブーム 水 京
 旅の恥踊る阿呆の仲に入り 進之助
 民謡を一つおぼえて旅おわる 三 司
 湯の宿で習うた唄で朝を発つ 梅 里
 観光に島のあんこも一役を 八 郎
 安米節署長は国へ辞めて去に 柳 志
 民謡の咽喉も綺麗な盆踊り 専 翁
 民謡のふるさと素朴なままだし 恒 明
 尺八は又も民謡せがまれる 柳 宏 子

民謡でお開きになる県人会 浩
 嘶し言葉だけにホステス役二人 黙 平
 唄になるオランダ坂は雨ばかり 梅 里
 顔振れへやとな炭坑節に変え 好 柳 郎
 民謡の味は本場の人が出し 句 楽 坊
 民謡の小節廻しがたまらない 栄
 民謡になって悲恋の美しく 栄
 民謡になって踊りの輪へ呼ばれ 柳 志
 民謡にすてた故郷をしのんどり 庸 佑
 民謡に母も昔に返える声 恒 明
 民謡も流して駅も客を呼び 好 柳 郎
 民謡のアレンジどこか他人めき 白 柳
 これが正調だよの民謡間がはずれ 生々庵
 都々逸が金婚にまで結びつけ 専 翁
 民謡になって老妓が休まされ 圭井堂

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報
 お家芸明治の色のままでよし 恒 明
 かけ持ちの途中でチツ山分けし 梅 里
 おこす気タクシー代は先手打ち 好 柳 郎
 お家芸時代の波についてけず 静 馬
 意中の品先手打つよに届けられ 一 舟
 お家芸世襲に批判もつ当主 生 薑
 善人に先手とられて笑えてき 水 客
 ホイホイと茶店は蛇を軽く追い 玲 人
 かけ持ちの愛情どこかでけつまずき 清 子
 妻の留守気楽と思うたは二三日 あいき
 かま首をもたげ心の奥の蛇 すゝむ
 蛇使いの恐がる方へもって行き 文 蝶
 蛇使い故郷の村は素通りし 小松園
 青大将ガキ大将にいじめられ 紫 水

かけ持ちでスターせりふをよくなし 文 秋
 うたた寝の手枕もよし夢もよし 東 天 紅
 うたた寝の旅の枕にカジカ啼く 弥 生
 老獺の先手も若さに歯がたたず 八 郎
 舞踊ひらけばさすがお家芸 専 翁
 定年になって気楽はまだ遠し 双 葉
 だし抜いたトッパ見出しに男位き 洋 敏
 予防線はっておねだり考える 秀 子
 気楽には入れそうもない門構え 良
 還暦の腰とは見えぬお家芸 宗 義
 弁財天お顔に合わぬ家来持ち 喜 仙
 ともかくも衣食住には欠かず 吉 羊
 三度目は家裁も気楽に判を捺し 失 名

川維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報
 この一本蘇生するぞと汗の父 美 柳 子
 汗の肌押しつけ押しつけ地下走る 天 樹
 芸人の玉なす汗もぬぐわれず 政 子

色紙短冊
 書画用品
 大坂戎道
 丹 月 堂
 電 南 セ ニ セ ニ

国なまり一駅毎に落着かず 大介
夕立にデートの時間ちと遅れ 喜代女
二〇分待てばこんなに濡れぬ雨 斐山
夕立の降る鳴る光る忙しき 勝子
夕立へ牛はおんなじ歩であるき 松風
虹の橋残して夕立移転する 古城

川雑 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山 快夢 起報

古稀すぎて消炭ほどの色気あり 快夢起
真面目さが世渡り下手にしてみたい 平八郎
月末の電話色気のない返事 麗花麗
萎びゆく色気声まで乾からびる 柳葉
拘った奴真面目な顔で隣に 泉水
生真面目に暮せと牧師いうけれど 紅茶
年寄りの色気不潔なものに見え 斧平
十六の色気ニキビが邪魔になり 拝山
子のために色気も何もあまるものか 静紀
差向い真面目と真面目無言なり 曉舟
ぼつぼつと真面目に溜めて隠退し 紅溪
お色気をなくした女強くなり カロ女
土壇場になって真面目な顔になり 浅太
リーダーが真面目の人で子を托し 静杉

杏林川柳会 (大阪市)

中島生々庵報

ひとり言回転椅子がすこしゆれ 生々庵
独り言のような演説まだつづき 端川
暴落へ悲鳴に近いひとり言 一哲
棘のある聞えよがしのひとり言 阿茶
言いたいこといわずあとから独り言 野迷路

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

森下愛論報

風鈴の音が夜店を派手にする 竹莊
風鈴の音一つせず蟬の声 宏子
現代の陛下がるに傘をさし 風仙洞
やつぱり蛇目がいいなオランダ坂 操
むりやりに持たした傘は忘れてき 草右
相台傘でもロマンスの花咲かず ハナ子
折りたたみ杖にもならぬ振り廻し 光弘
置傘の上に置傘して帰り 没食子
傘のしずくで満員車殺気だち 愛論
年でんな老眼鏡を持ち歩き 幸男
老眼鏡拭き拭き漫画見つめてい よしを

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

天気予報に抵抗傘持たず 八郎
払いもどし事務のミスとはいわぬなり 圭水
取過ぎの税金戻し印が 句念坊
払いもどしも予算に入れた金を借り 宏子
八百長が払いもどしにふみきらせ 勉
払い戻しあてにして酒を呑み 和郎
払い戻し受ける淋しい事故の夜 専翁
延着の払い戻しして喫茶に居路 郎

コクヨ川柳会 (大阪市)

三月四月五月六月より

川口理休報

寒むがりの名を返上の初詣り 柳波
水垢離を見て寒がりは風邪をひき 理休
寒むがりに会ってよいに寒むくなり はたる

手料理ときいて一箸つまみおき はたる
ビッコの靴下溢れる愛に辟易し 琺己
令夫人の御手製のものを無理に越す 留純
手不足を座っておれる年となり はたる
手不足のたしにもならぬ亭主持ち 理休
こぼれ出るほどの国がら人不足 同
信仰を看板にしてよくもうけ 昭一
ネオン燈景は無残な足をみせ 広彦
はげ山に看板我もの顔に立ち 同
老舗ですネオンなんかはつけられず 柳波
消防車祭りの様に通る過ぎ ぼたる
水芸のふりて出なはれ消防士 理休
愛される消防とかでマツチくれ 柳波
親父の酒またまた「わしらの若い時」 武
酒ぐせの悪さをかくす金を持ち 理休
泣き上戸笑い上戸を蹴わらかし 同

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

女房も帯一筋でものを言い 笑照
ビール腹人に言われる大物でなし 幸吾
恋のゆめビールの泡に似た始末 まさる
税金が小便利になりアワになり 栄一郎
あてられて来たやきもちの仲直り 東雲松
仲直りも派手なやくざの手打式 紅月
仲直り出来兼ねます月足らず 吉太郎
仲直りしているようであらう 摩太郎
名ばかりの夫と枕並べてい すみれ
新婚も間借の床は気がねして 日出男
病苦には勝てず神様仏様 六童子
縁談のきめては神にまかせます かずえ
そこぬけのアホも欲はチャシと知り 静林庵

そこぬけのあはといわれた女ぐせ 半月
そこぬけのお人でおすが真がおす 美代
せとぎわへ女にデンと居直られ 柳太
せとぎわになつても財布をまだにきり 花梢

あすなる川柳会 (大阪市)

山本素郎報

軽犯へ義を見てせざる人ばかり 梅里
衣替え気分を誘う窓景色 水邦
衣替え心あらたな旅に出る 百酒
手を出したとたんパンチが返って来 美男
アベックの手がどこかき気にかかる 武男
惚れた身は弱気になつてまだ貢ぎ 尤之
お隣りはお隣りと妻見栄ばらず 福郎
三階へ雨を知らせている 団地 惠美子
雨の駅母はしぶきに濡れて待つ 酔泉
長雨にヤケ酒もなき釜ヶ崎 幸兒
口で言うほどは恐縮しておらず 慶之助
肩で息ついて新妻夢を編み ゆきを
雨きけばかえらぬ恋の音がして 素郎

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

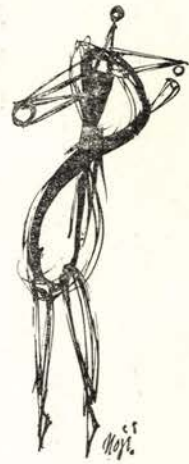
大萬

料亭

阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL(二三)三九三五番
アベノ橋近地下食通街
TEL(二三)〇一四七番
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL(二三)九一八四番

串の店

柳 樽 室



路 郎 生

★朝、夕は爽やかな風が吹く。句の秋だ。

★「一日は二十四時より多からず書けば読み得ず読めば書き得ず」と今は亡き晴浜氏が詠んでいるが、寸陰を惜しむ私たちと、レジャーだのバカンスだのと騒いでいる人たちは人種が違ってしまったのであろうか。

★八月十一日の日曜に緑雨君から手紙が届いた。いつもと違って、情書である。数行しかないが、よく判読して、高血圧で仆れたということと、食事も喰べさせてもらっているということだけ判ったので、すぐさま見舞に出かけた。静養中なので誰にも知らせてないとのこと、思ったよ

りは軽症らしいので、一時間余りで引揚げた。緑雨君は「川柳雑誌」創刊当時からの人で、本誌にとっては拔群の功労者であるので君の快癒の一日も早いことを祈っている。

★前号のアンケート「戦中戦後あなたは何を喰べましたか」が「夕刊」新聞で取りあげられ、その解答その他が半ページ大で紹介された。

★秋とともに本社の出版部が活発化して来た。岡山の浜田久米雄句集「凡人」は目下印刷部に廻っている。別欄広告の通り予約募集中である。これに続いてハワイの古川風竹、高沢一浪、内藤草一郎の三人集（仮称）、堺

の八木寧太郎の句集と雑筆の「旦過抄」が出ることになっている。

短歌や俳句に比して、柳書や句集の少ないことはあらそえない現状である。私が面倒が見られる間に、せいでい出してもらいたい。

★恒例の大阪市民文化祭の川柳大会は、新しい市長を迎え、市政はじまって以来の市職員の大異動があったので着手が遅れたが、川柳大会は十一月に催されることになり目下準備をやっていく。因みに短歌は十月、俳句は十二月に催されることになった。詳細は次号でお知らせしよう。

★関西短詩文学連盟主催、大阪府教委後援の「関西短詩文学作品展」は（別欄広告参照）目下、作品の制作が白熱化しているの、やがてうれしい展示となるであろう。

★九月二十三日は川柳忌だが、本社は繰上げて十日に句会を開くことにした。誌上へは北川春華編集局長に「川柳忌に思う」を執筆してもらった。

この日を期して、句への改革や、雑誌編集への考え方などについても衆智を集めて、よい雑誌の刊行を目指すことにしたい。

★九月五日に「大阪芸文協会（生魂神社社務所）で「川柳あれこれ」という講演をする」という講演をする。ことになった。いまの多忙では何を話そうとまよっている訳ではないが結局人生について、私見を語ることになるであろう。これなら私にも勉強になるからである。

★九月五日に「大阪芸文協会（生魂神社社務所）で「川柳あれこれ」という講演をする」という講演をする。ことになった。いまの多忙では何を話そうとまよっている訳ではないが結局人生について、私見を語ることになるであろう。これなら私にも勉強になるからである。

新 刊 紹 介

神田南歌氏（俳誌早春主宰）は昭和三十八年八月十日に豪華で清淑な句集「故郷」を池田市本町三一四八の早

春社から刊行された。頒価八〇〇円、千九〇円

☆川柳支部句会—九月

☆富柳句会—7日

（土）7時、題、満

月・身の上・安全、

所、富田林市公民館、

☆かがみ句会—2日

（月）夜、題、骨・一

息・変更・安堵・パカ

ンス、所、池田古心居。

☆玉造句会—9日（月）

6時半、題、罪・当外

れ・撫でる、所、市電

玉造南百米、大阪信用

金庫、☆阿倍野句会・

20日（金）7時、特

売・すし詰め・衆生・ハ

イウエー、所、阿倍野

区松崎町三ノ一〇割烹

大万、☆京都句会—15

日（月）夕、題、毒

舌・土管・金粉・先

約、所、四条錦手仲源

寺、☆南海電鉄句会・

19日（木）6時、題、契

約・断力・二人、所、

難波高架下親和クラ

ブ、☆明和研究会・

15日（日）一時、題、

残暑・老人・夜学、

所、阪神鳴尾駅下車

東南二百米鳴尾公民

館。

風 流

人 間 横 丁

価250円 送料70円

東野大八著

B6型 二五八頁

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザック・バランな人生批判が、その雄筆からはとばしるさまは凄く、まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である、後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

橋高薫風子著 麻生路郎序

川 柳 句 集 有 情

価250円 送料60円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って揉まれ、川柳編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。

発行所

川 柳 雑 誌 社



活力を高める

強精と長生への天然の強壮効果



日本新薬株式会社

ドイツ・マツク社製

強力 ローヤル・ゼリー 製剤



正式名 アピフォルティール

会長・麻生 葭乃女史

川柳 婦人友の会 会員を募る

川柳雑誌社内 川柳婦人友の会

入会希望者は往復はがきで……

連絡事務所 大阪市南区ニッ井戸町23

山 川 阿 茶

取次所

川柳雑誌社

麻生路郎先生著
川柳とは何か
―川柳の作り方と味わい方―
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽――そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は――以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

価 二五〇円
送 七〇円

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

麻生路郎著

好評噴々

新川柳鑑賞

価 二五〇円
送 八〇円
B 6 版
二五〇余頁

川柳の味い方・五百数十句

ものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがって、一氣に読ませる魅力がある。

(毎日新聞評)
麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとした

大 阪 市 住 吉 局 区 内 方 代 西 五 丁 目 二 番 地
発 行 所 川 柳 雑 誌 社
電 話 大 阪 (671) 六〇八一
郵 政 口 座 大 阪 七五〇五〇

Printed in Japan

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪(671)六〇八一
郵政口座 大阪 七五〇五〇

編集兼発行人 麻生 幸二 郎
大 阪 市 住 吉 局 区 内 方 代 西 五 丁 目 二 番 地

(禁転載)
半力年 七五六円(千) 共
一力年一、四四〇円(千) 共
昭和三十八年八月廿五日 印刷
昭和三十八年九月一日 発行

川柳雑誌 第三十八号
定価 一二〇円 (送料六円)

B列5号 毎月一回一日発行

▼ 投稿規定
▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼ 「近作柳梅」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課題吟」は誰でも投稿が出来る。
▼ 「川柳塔」の投稿は不朽洞会員に限る。

近作柳梅 (雑誌十句以内) 麻生路郎 選
川柳塔 (雑誌十句以内) 北川春巢 選
文 章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎 選
(毎月十五日締切)
錦魚 (十句以内) 黒川紫香 選
京都 (十句以内) 田中烏雀 選
紅一点 (十句以内) 河相すずむ 選
(九月十五日締切)
ウインク (十句以内) 土井文蝶 選
新鮮 (十句以内) 長野井蛙 選
和服 (十句以内) 高橋操子 選
(十月十五日締切)
毎号募集

募 集

課題吟募集

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿八年九月一日 発行 毎月一回一日発行

編集 兼 発行 印刷人

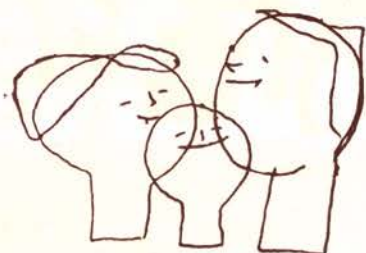
麻生幸二郎 発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二番五番地 電話大阪(67)六〇八一

定価百二十円(送料六円)

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

水がアイロンかけをする

クラボウ

ベルファスト
セルフ・アイロン・コットン

技術提携先—米国D・ミリケン社
製造発売元—倉敷紡績株式会社



新発売



生きぬく幸せの薬
アスパラ

■アスパラはまずこんな時に
疲れ易い時・疲れた時・全身の抵抗力をつける時・肝臓が弱っている時
●二日酔や自家・妊娠中毒・筋肉や関節の痛み・病中・病後の回復・食欲不振・便秘・脚気・湿疹・皮膚炎
60錠・120錠・300錠・内服液アンプル



新和歌遊園

ロープウェイ

南海電車

新和歌浦を一望におさめた空中散歩 高津子山へのスカイラインは四国淡路の連山も手にとるようです

料金 往復大人70円 小人35円
食堂 売店 駐車場 散歩道他
和歌山市駅下車電車又はバス
回転展望台大人30円 小人15円